

善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書10

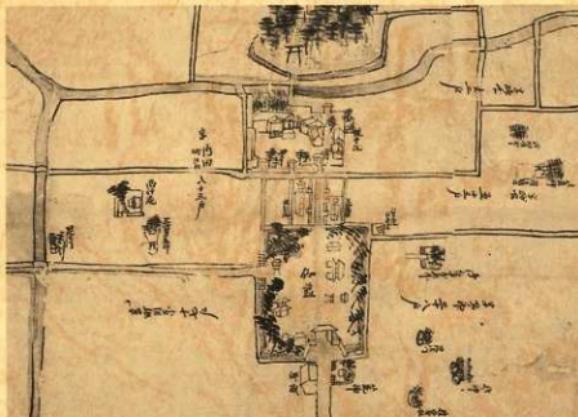
善通寺旧境内

善通寺陣所跡

四国学院大学構内遺跡

菊塚古墳

樽池西手山頂墳3号



平成17（2005）年3月

善通寺市教育委員会

善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書10

善通寺旧境内

善通寺陣所跡

四国学院大学構内遺跡

菊塚古墳

樽池西手山頂墳3号

平成17（2005）年3月

善通寺市教育委員会



1. 第3・3'トレンチ埴丘裾検出状況(北東から)



2. 第3・3'トレンチ埴丘裾完掘状況(北東から)



1. 第3トレンチ全景(南東から)



2. 第4トレンチ全景(北東から)

例　　言

1. 本書は普通守市教育委員会が平成16年度四庫補助事業として実施した、埋蔵文化財調査事業（普通守市内遺跡発掘調査事業）の発掘調査報告書である。
2. 本事業は普通守市善通寺町3-5(善通寺旧境内・H16ZKK)において平成16年4月22・23日（1次調査）、平成16年8月5日から8月13日（2次調査）、同善通寺町3-3-1(善通寺跡所跡・H16ZZA)において、平成16年7月1日から7月16日まで、同文京町3丁目(國學院大学構内遺跡・H16SGD)において、平成16年12月3日から12月10日まで、同善通寺町字大池東(菊塚古墳・H16KD)において、平成16年11月1日から11月30日まで、同善通寺町字伏見堀(柳池西手山頂墳3号H16TNS3)において、平成17年2月10日から3月10日まで発掘調査を実施し、調査中および調査終了後に各遺跡の調査資料と出土遺物の整理作業を実施した。現地調査・整理作業は、普通守市教育委員会文化振興室、室長補佐、笠川龍一の指導・協力のもと、同主任 渡邊淳子が担当した。現地調査および整理作業に参加した調査補助員は下記に記す。
3. 本書の執筆は渡邊および、善通寺市役所 海沿博史、関西大学大学院生、長江真和、関西大学文学部考古学研究室 米田裕貴子、松村祐希、森田浩史、国学院大学考古学研究部 田村隆明が行った。執筆分担は、付章第5節まとめを長江・海沿が、第1章・第2章第2節②・付章第3節耳環・同4節瓦類を海沿が、付章第1節土師器【高环】を長江が、同第1節土師器【壇・コップ型土器製品】を田村が、付章第2節須恵器【壺】を森田が、同【壺】を米田が、同【横瓶】を松村が、その他を渡邊が行った。また、丸亀市文化財審議委員 遠藤 亮氏より下稿を賜り、付章2に掲載した。編集は渡邊が行った。
4. 各遺跡の実測は、渡邊および調査補助員が行った。写真撮影は渡邊が行った。また本巻に掲載した挿図の実測、要図は、平成14年度出土遺物 須恵器を長江・米田・松村・森田が、土師器を田村が、遺物出土状況図および耳環・玉類を海沿が、その他は渡邊および調査補助員が行ったほか、片桐節子氏・加藤忠子氏のご協力を得た。遺物の接合検討、復元作業は平成14年度菊塚古墳出土遺物(土師器・須恵器)を、長江・西川英志・森田・伊藤 読・森下真企・米田・松村・田村が、その他を渡邊・海沿・田村が行った。なお、遺物実測図中、土器の断面は黒塗りが須恵器・白抜きが土師器・網掛けが瓦・瓦質土器・陶磁器を表す。遺物の写真撮影は菊塚古墳平成14年度出土遺物【耳環・瓦類】を海沿が、同【土師器・須恵器】を長江が、その他を渡邊が行った。
5. 菊塚古墳の調査および整理作業には、関西大学文学部考古学研究室(代表 米田文学教授)の、柳池西手山頂墳3号の調査および整理作業には、奈良大学文学部文化財学科考古学研究室(代表 植野浩三講師)の全面的なご指導、ご援助を頂いた。香川県埋蔵文化財調査センター・片桐孝浩氏には、現地指導および報告書作成について多大なご指導を頂いた。また、事業実施および本書の編集にあたっては、次の方々・機関よりご教示、ご協力を得た。記して謝意を表

します。

香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター・学校法人四国学院・四国学院大学考古学研究部・總本山善通寺・高柳精菴株式会社・独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所・パリノ・サー・ウェイ株式会社・東 信男・安藤文良・入江秀信・大久保徹也・遠藤 宏・大野宏和・小野秀幸・門脇範子・加納弘之・川端 聰・戸本晋司・小林謙一・佐藤竜馬・白川雄一・角南聰一郎・高畠 尚・高畠 将・豊島直博・中里伸明・中山尚子・信原芳紀・乗松真也・森原 哉・藤好史朗・松田朝山・松下孝幸・松下真実・松本和彦・宮脇武一・森下英治・山田哲也・山元敏裕・渡部明夫(順不同・敬称略)

調査補助員

(発掘および整理作業)：高田晃裕・奥山広規・山山遼介・具志堅有紀・福山博章(奈良大学文学部文化財学科考古学研究室)・土井辰宣・田村隆明・田辺 茂・三好健斗・久次米孝浩・寺島有紀・宮井文子(四国学院大学考古学研究部)・古岡優孝・横山正幸・松木瑠子(四国学院大学学生)

(整理作業)：細川晋太郎・長江貞和(関西大学大学院生)・伊藤 諭・森下真企・米田裕貴子・松村祐香・西川英志・森田浩史(関西大学文学部考古学研究室)・片桐節子・加藤恵子

発掘作業員

合田 賢・田中澤次

目 次

例 言

第1章 遺跡周辺の位置と環境	1
第2章 善通寺旧境内	6
第1節 調査の経緯と経過	6
調査日誌(抄)	8
第2節 調査の成果	8
①遺構	8
②遺物	10
第3節 まとめ	13
第3章 善通寺陣所跡	14
第1節 調査の経緯と経過	14
調査日誌(抄)	15
第2節 調査の成果	16
①基本層序	16
②遺構・遺物	16
第3節 まとめ	16
第4章 四国学院大学構内遺跡	18
第1節 調査の経緯と経過	18
調査日誌(抄)	19
第2節 調査の成果	20
①基本層序	20
②遺構・遺物	20
第3節 まとめ	20
第5章 菊塚古墳	22
第1節 調査の経緯と経過	22
第2節 調査の方法	23
調査日誌(抄)	24
第3節 古墳の立地	26
第4節 調査の概要	26
第5節 調査の成果	27
①遺構	27
②遺物	31
第6節 まとめ	32
①各トレンチの検討	32
②後円部墳丘復元案	34
付章1 平成14年度出土遺物	35
第1節 土師器	35
第2節 須恵器	42

第3節 土類	48
第4節 灰類	49
第5節 まとめ	57
付章2 菊塚古墳の石屋形に用いられた石材	60
第1節 はじめに	60
第2節 石屋形について	60
第3節 石屋形石材の岩質	62
第4節 採石地の推定	64
第5節 石材産地の比定	65
第6節 おわりに	66
第6章 槍池西手山頂墳3号	69
第1節 調査の経緯と経過	69
主要参考文献	70
写真図版	73

挿 図 目 次

第1図 普通寺遠景	1
第2図 調査地と周辺の主要遺跡	2
普通寺旧境内	
第3図 調査地位置図	6
第4図 トレンチ配置図	7
第5図 第1次調査 調査区上層断面図	9
第6図 第2次調査 調査区平・断面図	11
第7図 1次調査出土遺物実測図	12
第8図 2次調査出土遺物実測図	12
普通寺跡所跡	
第9図 調査区位置図	14
第10図 調査区配置図	15
第11図 調査区平・断面図	17
四国学院大学構内遺跡	
第12図 調査区位置図	18
第13図 トレンチ配置図	19
第14図 作業風景	19
第15図 調査区平面・土壙断面図	21
菊塚古墳	
第16図 調査区位置図	22
第17図 作業風景	24

第18図	作業風景	25
第19図	第1・4トレンチ調査区平・断面図	28
第20図	第3・3'トレンチ調査区平・断面図	29~30
第21図	砂糖甕検出状況・断面図	29~30
第22図	第3トレンチ出土遺物実測図	32
第23図	後円部壇丘復元案	33
第24図	土体部遺物取り上げ跡区様式図	35
第25図	土体部土師器出土状況図①(床面上層)	36
第26図	土体部土師器出土状況図②(床面直上)	37
第27図	土体部出土土師器実測図①	38
第28図	土体部出土土師器実測図②	39
第29図	土体部須恵器出土状況図①(床面上層)	43
第30図	土体部須恵器出土状況図②(床面直上)	44
第31図	土体部出土須恵器実測図①	45
第32図	土体部出土須恵器実測図②	46
第33図	土体部出土装身具実測図①	50
第34図	土体部出土装身具実測図②	51
第35図	七葉山古墳石室内須恵器転用枕推定図	59
第36図	玄室内の石屋形	60
第37図	石屋形各部の名称	61
第38図	石屋形各部の形態	62
第39図	粒径による火山碎屑岩の分類	63
第40図	石材採石推定地周辺分布図	63
第41図	中山南東部の凝灰岩堆積層の露頭	64
第42図	瓦谷川の石塊や白い崩落土	65
第43図	地域別火山疊凝灰岩標本写真	68
櫻池西手山頂墳3号		
第44図	調査区位置図	69

表 目 次

第1表	出土土師器観察表①	40
第2表	出土土師器観察表②	41
第3表	出土須恵器観察表	47
第4表	出土装身具観察表①	52
第5表	出土装身具観察表②	53
第6表	出土装身具観察表③	54
第7表	出土装身具観察表④	55
第8表	地域別火山疊凝灰岩	65

付図 菊塚古墳墳丘測量図

写真図版目次

菊塚古墳

- 巻頭図版1-1 第3・3'トレンチ墳丘検出状況(北東から)
巻頭図版1-2 第3・3'トレンチ墳丘発掘状況(北東から)
巻頭図版2-1 第3トレンチ全景(南東から)
巻頭図版2-2 第4トレンチ全景(北東から)

善通寺旧境内

【1次・第1トレンチ】

- 図版1-1 トレンチ周辺(北半・南から)..... 75
図版1-2 トレンチ周辺(北半・北から)..... 75
図版1-3 全景(北から)..... 75
【1次・第2トレンチ】
図版2-1 遠景(北から)..... 76
図版2-2 南壁断面(北から)..... 76
図版2-3 西壁断面(東から)..... 76

【2次・第1トレンチ】

- 図版3-1 全景(南西から)..... 77
図版3-2 全景(南から)..... 77
図版3-3 東壁断面(西から)..... 77
図版3-4 上手状造構(西から)..... 77

【2次・第2トレンチ】

- 図版4-1 全景(南西から)..... 78
図版4-2 全景(南から)..... 78
図版4-3 重機掘削状況..... 78
図版4-4 東壁断面(西から)..... 78

【2次・第3トレンチ】

- 図版5-1 全景(南西から)..... 79
図版5-2 全景(深掘後・南から)..... 79
図版5-3 重機掘削状況..... 79
図版5-4 東壁断面(西から)..... 79

善通寺跡所跡

- 図版6-1 全景(西から)..... 80
図版6-2 全景(北から)..... 80
図版6-3 東部深掘断面(北から)..... 80
図版6-4 調査区遠景(南東から)..... 80
図版7-1 調査区西部(検出状況・北から)..... 81
図版7-2 調査区西部(完掘状況・北から)..... 81
図版7-3 ピット2(南から)..... 81
図版7-4 土坑3(北から)..... 81
図版8-1 調査区東部(北から)..... 82
図版8-2 調査区東部(西から)..... 82
図版8-3 ピット1完掘状況(南から)..... 82
図版8-4 骨礫器出土状況(南から)..... 82

図版8-5 北・車塙石列(南から).....	82
図版8-6 近代上坑断面(西から).....	82
四国学院大学構内遺跡	
図版9-1 第2トレント全景(北西から).....	83
図版9-2 第1トレント(南から).....	83
図版9-3 第3トレント(南から).....	83
菊塚古墳	
図版10-1 菊塚古墳遠景(北から).....	84
図版10-2 後円部全景(南から).....	84
図版10-3 後円部全景(北から).....	84
【第1・2トレント】	
図版11-1 第1トレント全景(北から).....	85
図版11-2 第1トレント西壁(中央部・東から).....	85
図版11-3 第1トレント西壁(北部・東から).....	85
図版11-4 第1トレント西壁(南部・東から).....	85
図版11-5 第2トレント全景(南から).....	85
【第3トレント】	
図版12-1 砂糖窯検出状況(南から).....	86
図版12-2 砂糖窯完掘状況(南から).....	86
図版12-3 砂糖窯断面(北から).....	86
図版12-4 砂糖窯遠景(東から).....	86
図版13-1 第3・3'トレント全景(付東から).....	87
図版13-2 全景(東から).....	87
図版13-3 墳丘裾溝(南西から).....	87
図版13-4 周庭堆積木出土状況(南西から).....	87
【第3'トレント】	
図版14-1 墳丘裾検出状況(南西から).....	88
図版14-2 墳丘裾完掘状況(南西から).....	88
図版14-3 南壁断面(北西から・上は第3トレント).....	88
【第4トレント・遺物】	
図版15-1 全景(北東から).....	89
図版15-2 南壁断面(北東から).....	89
図版15-3 墳丘裾溝(南東から).....	89
図版15-4 第3トレント出土遺物.....	89
【主体部出土遺物】	
図版16-1 土師器 集合.....	90
図版16-2 灰陶器 集合.....	90
図版17-1 灰陶器 虹.....	91
図版17-2 灰陶器 台付壺・甕.....	91
図版17-3 灰陶器 橫瓶.....	91
図版18-1 耳鏡 集合.....	92
図版18-2 玉類 集合.....	92

第1章 遺跡周辺の位置と環境

善通寺市は香川県西部の内陸部に位置し、真言宗開祖の弘法大師(空海)が誕生した場所として有名な田園都市であり、總本山善通寺の門前町として発達している。

東は丸亀市、西は三豊郡高瀬町・三野町、南は仲多度郡琴平町、北は仲多度郡多度津町と境を接している。

善通寺市周辺に広がる丸亀平野は、土器川や金倉川・弘田川の土砂堆積によって形成された香川県下最大の沖積平野で、これらの河川による扇状地・氾濫原・小三角州などから形成されている。南から北に下る緩やかな傾斜になっているため、たいがいの場所から瀬戸内海や対岸の岡山方面を望むことができる。この河成沖積層の土壤は、下層が灰褐色のマンガン結核を含む黄褐色砂質土層、表層70~80cmが強粘土質砂礫層で構成されており、通常弥生時代以後の遺構はこの下層上面に遺存している。この黄褐色砂質土層には、まれに縄文土器片が含まれていることが知られていたが、四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査などによって、この土層は縄文時代後期から晩期にかけて堆積したことが確認されている。

善通寺市の北には、讃岐の中世山城跡を代表する天霧城跡が山頂部に所在する天霧山、西から東にかけては、火上山・中山・我拝師山・筆ノ山・香色山が麓を連ねて並んでおり、五岳と呼ばれるこれらの山塊は、あたかも五枚の屏風をたてかけたようにそびえていることから、この山麓の地は屏風ヶ浦とも呼ばれ、古くから信仰の対象であった。その南には、中山に連なる東部山・有岡の里を経て大麻山がそびえており、平地には鶴が峰・磨臼山・如意山・鉢伏山・甲山などの小丘が散在している。

瀬戸内海の南岸に位置し気候と風土に恵まれた丸亀平野は、古くから文化が開けた土地であり、丸亀市の中ノ池遺跡、善通寺市の五条遺跡、善通寺市から多度津町にかけて広がる三井遺跡など、弥生時代前期から中期にいたる同時代の遺跡群が知られている。中ノ池遺跡では環濠と想定される三重の大溝が検出され、弥生時代前期古段階の弥生土器を中心に、一部中期的様相を呈するものまで出土している。三井・五条遺跡では遺構・遺跡の範囲などについては現在も詳細は不明であるが、出土した弥生土器は畿内第I様式中段階から新段階に相当することが確認されている。

これらの遺跡群は自然堤防上に立地しており、現在の海岸線から2~3kmの距離があるが、当時の海岸線が現在の標高5m付近と推定すれば、三井遺跡や中ノ池遺跡などは海岸部に形成された集落であることがわかる。更にこれらの遺構が遺存する黄褐色砂質土層とこの下の洪積層の間



第1図 善通寺遠景

背後の山は左端から大麻山・香色山・筆ノ山・我拝師山(この手前の小丘が甲山)・中山・火上山



第2図 調査地と周辺の主要遺跡

には、細文時代後期から奈良時代の生活痕跡が確認されている。また、四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査によって、市内古原町から旧石器も出土しており、現在のところ本市の古代文化は約2～3万年前まで遡ることができる。

善通寺市街地の北一帯には、呑川原を代表する弥生時代の中軸的な集落遺跡がある。西は峠の山地から、東は四国農業試験場の敷地にまでおよんでおり、ここが旧陸軍第十一師団の練兵場用地であったことから出練兵場遺跡と呼ばれている。

昭和30年頃の四国農業試験場の用地整備工事に伴って、弥生時代前期から後期にかけての小兒塚積土・放矢・多数の土器・石器類が出土した。また、墓道整備工事の際に国立病院付近から弥生土器に加えて須恵器や小玉などが大量に出土したことなどから、遺跡は弥生時代のみならず、古墳時代にまでおよんでいることが確認された。

旧練兵場遺跡はこのように広い範囲におよぶ可能性が高いばかりでなく、弥生時代前期から後期・古墳時代にかけての連続性が考えられる、県下でも例のない存在であることが分かっている。ただ、最近の調査によってこの旧練兵場遺跡は幾つかの川道によって分断されていることが判明し、旧練兵場遺跡群としてとらえた方が良いと考えられる。

この遺跡群では、これまでに数多くの発掘調査が実施されている。以下、主な調査を順に紹介する。善通寺普通寺の西に流れる弘川沿いで昭和52年に実施された善通寺西遺跡では、弥生時代後期から古墳時代にかけての用水路が検出され、多数の小堀丸式壺・船の櫂や材木などが出土しており、生活基盤である水田城の拡大が行われたことや古い溝の発掘に伴う祭祀が行われたことが確認されている。昭和58年には、遺跡群の東端部に所在する白鳳時代建立と考えられる普通寺の前寺・仲村庵寺(伝塔跡)の発掘調査が実施され、寺域の北端やその下層の弥生時代中期から古墳時代にかけての遺構が検出された。昭和59年には、善通寺西遺跡から弘川沿いの約600m下流に所在する彼ノ宗遺跡の発掘調査が実施されたが、ここでは約1,500mの調査区から弥生時代中期から後期にかけての堅穴住居・小堀丸式壺15基・無数の柱穴と土坑群、古墳時代の掘建柱建物跡2棟とそれに伴う水路、二重の崩落をもつ多角形墳の基底部など、多くの遺構・遺物が確認された。特に弥生時代終末期の堅穴住居からはその臨終時の祭祀に用いられたと考えられる假製内行花文鏡片の懸垂鏡や銅鏡、多数の玉類が出土しており、この地区における弥生時代終末期の動向を推測する上で注目されている。昭和60年には彼ノ宗遺跡から更に約500mの仙遊遺跡で弥生時代後期の箱式石棺と小堀丸式壺3基が発見されたが、この箱式石棺の石材には入れ墨を施した人面や鳥の絵の他、竪張文状の文様が一面に線刻されていたことから全国的な話題となった。その後も、国立善通寺病院や四国農業試験場などではこれまで頻繁に発掘調査

- 1：阿赤陀堂遺跡
- 2：高瀬遺跡
- 3：乾瀬跡
- 4：中村遺跡
- 5：永井遺跡
- 6：福木瀬跡群
- 7：金鏡寺下所瀬跡
- 8：五条瀬跡
- 9：九頭神遺跡群
- 10：石川遺跡
- 11：甲山北瀬跡
- 12：旧練兵場遺跡群
- 13：香色山遺跡群
- 14：西国学院大学構内遺跡
- 15：生野本町遺跡
- 16：生野南口遺跡
- 17：御忌林遺跡
- 18：我孫子山遺跡群
- 19：鶴が峰西麓遺跡
- 20：瓦谷瀬跡
- 21：南原麻板遺跡
- 22：北原シンネバエ遺跡
- 23：下吉田八幡古墳
- 24：丸山古墳
- 25：鶴が峰4号墳
- 26：巖臼山古墳
- 27：王墓山古墳
- 28：宮が尾古墳
- 29：野田院古墳(24～29：筆者指定史跡 有岡古墳群)
- 30：鶴が峰山頂古墳
- 31：御館古墳
- 32：岡(光)古墳群
- 33：丸山1号墳
- 34：丸山2号墳
- 35：寺田1号墳
- 36：寺田2号墳
- 37：鶴の巣古墳
- 38：大森山根賀塚古墳
- 39：大麻山根塚古墳
- 40：宮ガ尾2号墳
- 41：瓦谷1号墳
- 42：大塚池(吉原梅荷塚)古墳
- 43：北原古墳
- 44：善通寺伽藍
- 45：仲村庵寺
- 46：野田院跡
- 47：香色山經塚
- 48：仲村城跡
- 49：甲山城跡
- 50：菊塚古墳
- 51：三井遺跡
- 52：橋池西手山根塚3号

第2回 凡例

が行われているが、いずれの調査でも住居跡が複合し密集した状態で遺存しており、正確な集落の規模は今も把握できていない。この遺跡の東側には九頭神遺跡・稻木遺跡・石川遺跡と続いている。

また、ここから北方に広がる善通寺平野には、旧練兵場遺跡と同様に弥生時代の古い時期から古墳時代にかけての大規模な集落遺跡が幾つか知られている。まず旧練兵場遺跡から北方500mあたりには九頭神遺跡があり、ここでは昭和62年に都市計画道路改良工事に伴う発掘調査が実施され、弥生時代後期頃の堅穴住居や小児塗棺墓・箱式石棺墓などが確認された。九頭神遺跡から東方500mあたりには弥生時代から古墳時代にかけての遺物が多量に散布することで知られる石川遺跡が広がるが、未調査のため詳細は不明である。九頭神遺跡の北方に隣接する稻木遺跡では、四国横断自動車道路建設に伴う調査が昭和58年から昭和60年にかけて、また県道善通寺白方線改良工事に伴う調査が昭和61年度と昭和63年度の二度実施されており、弥生時代から古墳時代にかけての堅穴住居群や墓地、中期の建物跡群などが確認されている。旧地形をみると、これらの集落遺跡群はいずれも複数の旧河道帯に形成された微高地に営まれたものであり、これまでの調査結果からいずれも同時期に併存したものであることがわかる。したがって弥生時代頃の善通寺周辺には、「大集落」というよりはむしろ「小国」が誕生していたと考えた方が良いかも知れない。

また、善通寺市内からは与北山の陣山遺跡で平形鋼剣3口、大麻山北麓の瓦谷遺跡で平形鋼剣2口・細形鋼剣5口・中細形鋼鉢1口の計8口、我拝師山遺跡では計3カ所から平形鋼剣5口・銅鐸1口、北原シンネバゴ遺跡で銅鐸1口など青銅器が数多く出土している。また、近年旧練兵場遺跡では、小銅鐸をはじめ複数個の銅鐸片が出土し話題となった。市内出土の弥生時代青銅器の数が県下出土数の約4割を占めていることは特筆すべきことである。旧練兵場遺跡群や周辺部の遺跡群を本拠とした集団との関連も注目される。

やがて弥生時代に開始された稻作文化は完成期を迎え、丸龜平野の肥沃な生産基盤を背景に、独自の技術を持った特定の有力者が灌漑治水事業などを行い耕作面積を増大させた。この勢力が地域を代表する権力者となり有岡地区を中心に数多くの墳墓を築くようになるが、古墳時代を迎えるこの地の勢力はさらに発展を続ける。

この頃の集落域は現市街地の北方と東方に広がりを見せ、市街地の南西部の丘陵部が墓域と推定される。この地区的古墳は確認されているだけでも400基以上を数え、中でも香色山・筆ノ山・我拝師山で北部を、大麻山で南部を張られた弘出川流域の有岡地区は、前方後円墳が集中する地域として有名である。

まず古段階の古墳としては、大麻山山麓中でも比較的高所を中心に大麻山横賀塚、大麻山経塚、野田院古墳、御忌林古墳、大浦経塚古墳、丸山1号・2号墳など数多くの積石塚が築かれている。御忌林古墳と丸山2号墳以外は全て前方後円墳であり、積石塚古墳分布範囲の最西限に位置している。中でも野田院古墳は、標高405m(平地との比高差約370m)という全国的にも有数の高所に立地する丸龜平野最古級の前方後円墳である。大麻山北西麓のテラス状平坦部に立地しており、前方部は築土、後円部は積石で構築されている。史跡整備に伴う発掘調査によって壺形上器が多く出土した。また、後円部と前方部の具体的な構築方法を確認するなど、多くの成果が得られた。築造年代は3世紀末頃と推測される。

また有岡地区の平地部分には、前期から後期にかけての多数の前方後円墳が直線的に並んで築かれている。北東から南北方向に順に生野鍬子塚古墳(消滅)・磨臼山古墳・鶴が峰2号墳(消滅)・

鶴が峰4号墳・丸山古墳・王墓山古墳・菊塚古墳が知られており、その状況から同一系譜上の首長羣葬と考えられているが、中でもその中央の小丘陵上に築かれた王墓山古墳は一断面を引く存在である。王墓山古墳では、石屋形を有する横穴式石室が検出され、内部からは金銅製冠帽や象嵌付き鉄刀、多数の馬具・鉄製品・装飾品・土器などが出土した。また、菊塚古墳でも石屋形を検出し、多数の遺物が出土した。

古墳時代後期になると大麻山山麓部を中心に群集墳が多数出現する。現在する群集墳の中には線刻画で装飾された横穴式石室が計8基確認されており、それらが共通モチーフを有している点は大変興味深い。宮が尾古墳もそのひとつである。線刻画ではそのモチーフの正体を把握しにくいものが多いが、宮が尾古墳には周辺の装飾古墳と共通したモチーフのほか、人物群や船、騎馬人物が具象的に描かれており、装飾古墳を考える上で極めて貴重な存在と考えられている。

この頃の九鬼平野は金倉川の東が那珂郡、西が多度郡と呼ばれており、多度郡には佐伯氏一族が勢力をもっており、有岡一帯の前方後円墳群についても佐伯の一一代系譜の墓とする考えが有力である。

やがて仏教の伝来に伴い、白鳳期には佐伯氏の氏寺である伝導寺(仲村庵寺)が御紳兵場遺跡の一角に建立される。しかし、この寺は短期間で消滅し、後に500m程南面に移転されたものが現在の普通寺伽藍ではないかと考えられている。奈良時代末、宝龟五(774)年この地の有力豪族であった佐伯氏に弘法大師空海が誕生する。平安初期、大同二(807)年に唐から帰朝した空海が、長安の青帝寺を模して今の伽藍の場所に真言宗最初の根本道場として普通寺を建立した。創建当時は四町四方の境内に金堂や大塔、講堂、法華堂、西塔、護摩堂のほか、四十九の僧房があったといわれているが、平安時代末頃から鎌倉時代、そして南北朝時代にかけては、社会環境の人々の変化に伴い幾度も荒廃の危機に曝された。これを反映するように、普通寺の西側に隣接する香色山山頂では平安時代末頃の経塚群が確認されている。末法思想を背景として、この地を活動の基盤とした豪族(佐伯氏)や普通寺の僧侶達が造り上げたものであるが、中には子孫のために經筒などの埋納場所を事前に確保しておいたとみられる上下二段構造の経塚(香色山1号経塚)が、平成9年夏に発見され注目を集めた。

普通寺は戦国時代、永祿元(1558)年には番川・三好内軍の戦火により焼失してしまう。その後復興が始まるのは、やがて江戸時代に德川幕府が封制制度を確立してからのことであるが、四箇八十八ヶ所巡礼や金剛羅参りが全国的な信仰行事となるのはこの頃からであり、八十八ヶ所のうち五ヶ寺が現市内に所在するこの地域は、總本山善通寺を中心に門前町として活気を取り戻す。

明治29(1896)年には陸軍第一師団が設置され、門前町に加えて軍都としての性格を帯びるようになり、これに伴い道路や鉄道が整備された。この頃建設された洋風デザインの建造物群は市街地に今も多数残され、独特の景観を呈している。

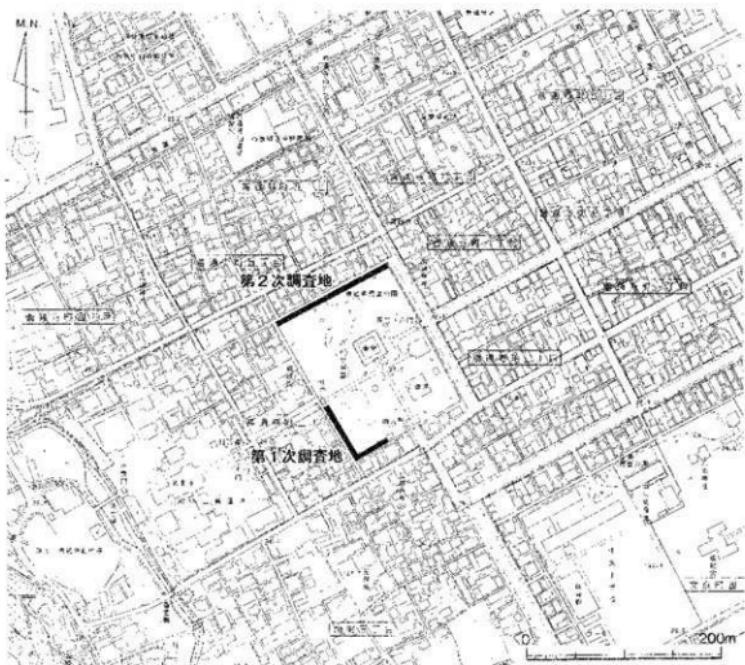
これにより普通寺町として都市化が始まり、昭和29(1954)年3月31日に竜川村・与北村・樂岡村・吉原村との合併により市制が施行され普通寺市が誕生し、現在に至っている。

第2章 善通寺旧境内

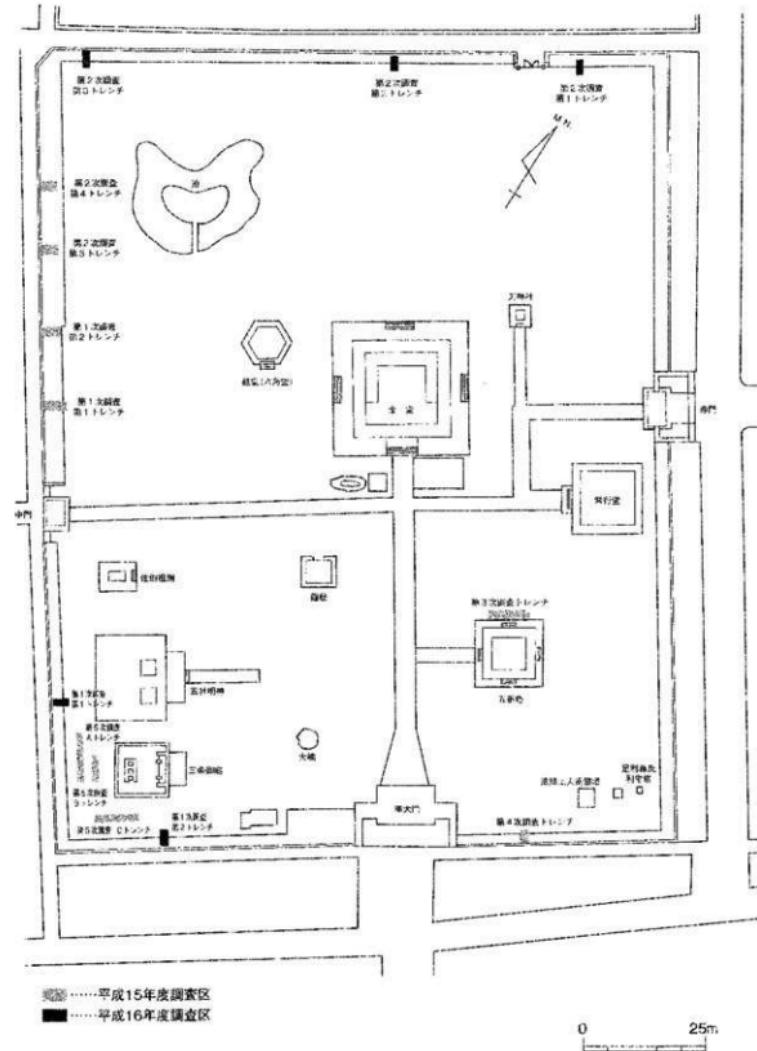
第1節 調査の経緯と経過

總本山善通寺は平成18年に創建1200年を迎える。それに伴い昨年度より境内整備が進められているが、約30年前の部分的な調査以外に確認調査などは実施されておらず、遺構の状況などが不明であった。そこで、本年度は昨年度に葺き構造物建設予定地において、確認調査を実施した。調査は他遺跡の調査の關係から断続的に行なったため、計2次におよんだ。調査方法は該当地に任意でトレチを設置し重機および入力にて掘削を行なった。そして土壠断面の観察、写真撮影、縮尺20分の1での図化を行なった。なお、遺跡が県指定史跡に指定されているという重要性を勘案し、調査面積および下層の掘削は最小限に留めた。

なお、今年度の調査は昨年度より行われている旧境内四周塀沿いの調査の続きである。昨年度の調査では北西部、東南部で中世の上手状遺構を検出している。またさらにその下層では、弥生時代の包含層が存在することが確認されている(第4図)。以下、概要を説明する。



第3図 調査地位置図 (1:5,000)



第4図 トレンチ配置図 (1 : 1,000)

平成15年度調査の概要

【第1・2次調査】 旧境内西面の中門北部分で4ヶ所調査区を設定した。第1～4トレンチともに南北方向の土手状遺構を検出した。土手状遺構は大きく2層に分かれ、上層と下層で遺物に時期差が認められる。出土遺物から推察して土手状遺構の年代は、上層は室町期、下層は中世前半と推定される。さらにその下層には古墳時代の遺構および弥生時代の包含層が確認された。

【第3次調査】 旧境内南東部の五重の塔北側に該当する。中世の遺物包含層を検出した他は、平面・断面とともに明確な遺構は確認できなかった。

【第4次調査】 旧境内南東面に該当する。東西方向の土手状遺構を検出した。土手状遺構は大きく2層に分かれ、上層と下層で遺物に時期差が認められる。第1・2次調査で検出した土手状遺構同様、上層は室町期、下層は中世前半の年代を比定できる。2次調査で検出した弥生時代の包含層は確認できなかった。

【第5次調査】 旧境内の西南隅で、3ヶ所調査区を設定した。中世以降の遺物包含層のみで、平面・断面とともに明確な遺構は確認できなかった。

調査日誌(抄)

(第1次調査)

4月22日(木) 天候: 晴

を確認する。

伽藍南西側の西側・南側にそれぞれ1ヶ所、合計2ヶ所のトレンチを設定する。重機掘削のち、

4月23日(金) 天候: 晴

1トレンチの壁面精査を行う。断面で土手状遺構

2トレンチの壁面精査、断面図の作成をする。

(第2次調査)

8月5日(木) 天候: 晴

8月9日(月) 天候: 晴

伽藍北側に合計3ヶ所のトレンチを設定する。

室内にて、出土遺物の水洗を行う。

1・2トレンチの重機掘削を行う。その後壁面精査、土層断面図の作成、写真撮影をする。

8月10日(火) 天候: 晴

室内にて図面・写真整理を行う。

8月6日(金) 天候: 晴

8月11日(水) 天候: 晴

3トレンチの重機掘削を行う。その後壁面精査、土層断面図の作成、写真撮影をする。下層の

室内にて、出土遺物の水洗を行う。

土層堆積状況を確認するため重機で深掘りしたところ、ピットを検出する。埋土の遺物を取り上げ、現地での調査を終了する。

8月12日(木) 天候: 曇

室内にて、出土遺物の水洗を行う。

8月13日(金) 天候: 曇

室内にて、出土遺物のトレスを行った。

第2節 調査の成果

①遺構

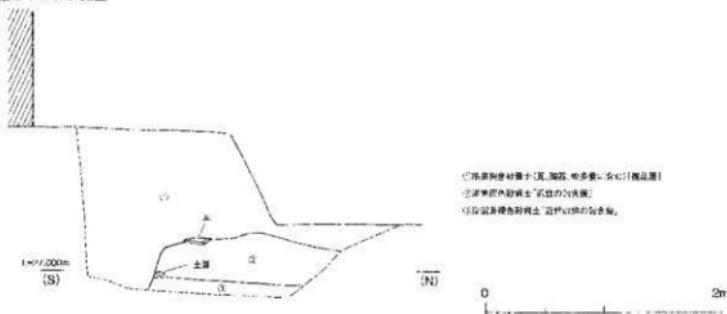
【第1次調査】 調査地は普通寺旧境内の南西辺に該当する(第3図)。第1トレンチは西壁に第2トレンチは南壁に、それぞれ縦に直交するように1本ずつトレンチを設定した(第4図)。

第1トレンチの土壌は表土を除くと、2層に分層できる(第5図)。第1層は、淡黄褐色質土で

第1トレーニング北壁



第2トレーニング西壁



第5図 第1次調査 調査区土層断面図 (1:40)

ある。上層②が相当する。土手状遺構上部に該当し水平に堆積している。締まりはやや悪い。第2層は、土手状遺構下部に該当する。上層③が相当する。淡黄灰砂質土で、橙色跡を含む。第1層の下層に位置し水平に堆積している。土手状遺構は現状の堀から約1.5m付近で西から東へ下方に落ちている。今回検出した土手状遺構が、平成15年度調査で検出された土手状遺構との層に相当するかは特定できなかった。

第2トレーニングの土層は搅乱を除くと、2層に分層できる(第5図)。第1層はいぶし瓦や土器を含む近世の包含層で、水平に堆積している。第2層は、第1層の下層に位置し水平に堆積している。炭混質褐砂質土で遺物を含んでいないため時期の判別は困難であるが、現状では近世以前の包含層としておく。第2トレーニングでは、昨年度調査および本年度第1トレーニングにみられる土手状遺構は、検出されなかった。旧境内南辺は現在法面を石垣で補強した土手となっており、上部に扉が建てられている。付近の調査(平成15年度5次調査Cトレーニング、4次調査)でも搅乱・削平を受けしており、当トレーニングはおそらく石垣の構築等で、遺構が削平されている可能性が高い。

【第2次調査】 調査地は善通寺町境の北辺に該当する(第3図)。北門をはさんで東側に第1トレンチ、西側に第2・第3トレンチとそれぞれ縦に直交するように合計3つのトレンチを設定した(第4図)。

第1トレンチは表土・擾乱を除くと、2層に分層できる(第6図)。第1層は、弥生土器片を多く含む包含層である。上層⑥が該当する。出土した土器は碎片で著しく磨滅しており、二次的な堆積によるものと考えられる。第2層は褐灰砂質土で北壁塀より10mの地点で北から南へ下方に落ちる。上層⑦が該当する。遺構の形態から土手状造構であると推測される。

第2トレンチは表土・擾乱を除くと、3層に大別できる(第6図)。第1層は土手状造構上層に該当する上層⑦である。第2層は土手状造構下層に該当し、水平に堆積しており、縦まりは良い。上層⑧・⑨が該当する。第3層は土手状造構の流出土であり、土層⑩・⑪が該当する。

第3トレンチは、表土・擾乱を除くと、4層に大別できる(第6図)。第1層は土手状造構上層に該当する土層④である。第2トレンチ上層⑦と同じである。第2層は土手状造構中層に該当し、水平に堆積している。土層⑥・⑦が該当する。第3層は土手状造構下層に該当し、水平に堆積しており、縦まりは良い。土層⑨・⑩が該当する。第4層は弥生時代の包含層である。上層⑫～⑯が該当する。炭化じりの黒褐色土で、一部焼土が薄く堆積している面がある。⑭・⑮の上面からは、ピット2基を検出した。ピット1からは弥生土器片と須恵器片が、ピット2からは弥生土器甕が出土した。

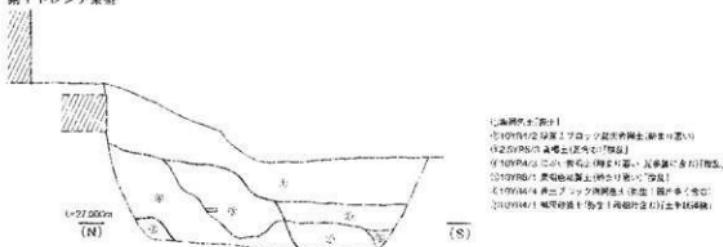
各トレンチで共に土手状造構を検出している。各土手状造構の相互関係は、第2トレンチ土手状造構上層(土層⑦)に第3トレンチ土手状造構上層(土層④)が該当し、第1トレンチ土手状造構(土層⑦)に第2トレンチ土手状造構下層(土層⑧・⑨)と第3トレンチ土手状造構中層(土層⑥・⑦)が該当する。

②遺物

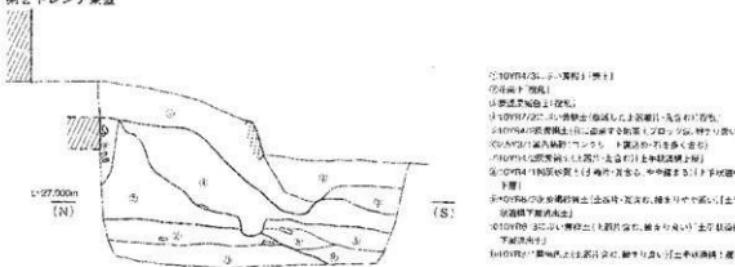
【第1次調査】 (1)は唐草文軒平瓦である。重機掘削中排土より出土した。焼成はやや不良で土師質である。瓦当端部の10%程度しか残存していない。素文縁の瓦当に退化した1葉構成の唐草文を配する。頭の形態は段頭で、平瓦部の凹面には布目の痕跡が、凸面には継方向のナデ調整が認められる。平瓦部と瓦当部とが接合している内面には粘土が充填されており、接合時の横方向のナデ調整が確認できる。

【第2次調査】 (1)は須恵器坏身である。第2トレンチ⑩より出土した。口縁部は欠損している。体部はやや内凹気味に立ち上がり、底部との境界部には外側に若干踏ん張った高台を貼り付ける。調整は内外面ともに横方向のナデ、底部は回転ヘラ削りである。色調は内外面ともに灰白色、焼成は良好、残存率は高台部15%である。8世紀前半頃と思われる。(2)は須恵器坏身である。第2トレンチ⑪より出土した。口縁は直線的に伸び、内面に弱い凹線を有する。端部は内面に面を持つ。体部は強いナデ調整による後縁がみられる。器壁は薄い。底部は一部しか残存せず詳細は不明である。内外面とも回転ナデ調整、色調は内外面ともに灰色、焼成は良好、残存率は口縁部10%以下である。(3)は須恵器坏蓋である。第3トレンチより出土した。口縁部のみが残存する。坏部は途中より屈曲する。端部は丸く收める。内外面とも回転ナデ調整、色調は内外面ともに灰白色、焼成は良好、残存率は口縁部10%以下である。田辺編年のTK43併行期に該当し、6世紀後半頃と思われる。(4)は須恵器甕である。第3トレンチ⑯より出土した。口縁部のみ残存

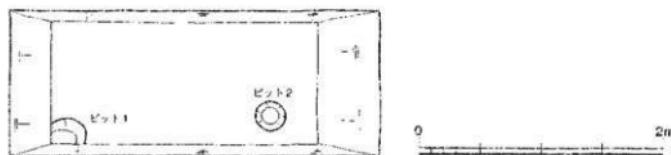
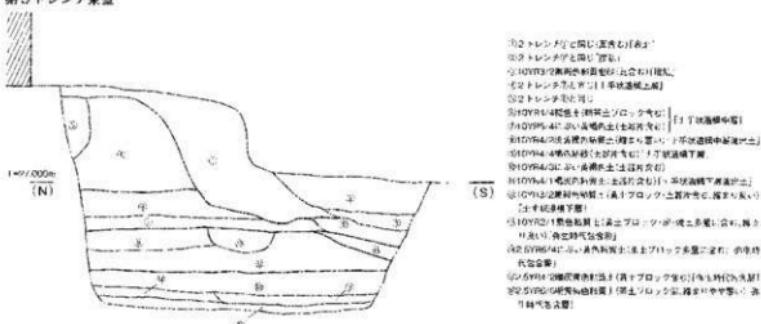
第1トレンチ東壁



第2 トレンチ戦時



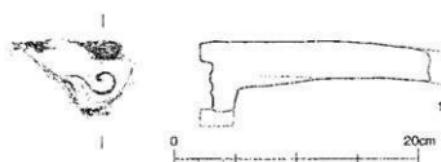
第3トレンチ製版



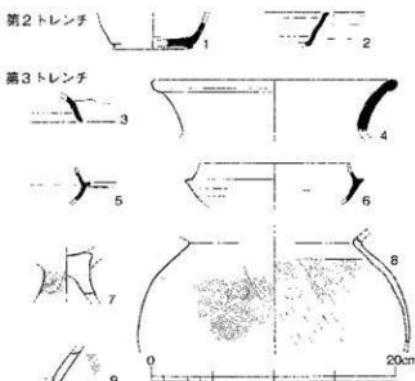
第6図 第2次調査 調査区平・瀬面区(1:40)

する。口縁部は外反し、端部を折り返して玉縁状に整形する。内外面とも回転ナデ調整、色調は内外面ともに灰白色、焼成はやや不良、残存率はL1縁部20%である。(5)・(6)は須恵器坏身である。いずれも第3トレンチ¹²・¹³より出土した。(5)は受け部のみが残存する。

立ち上がりは内側にはほぼ直線的に伸びる。端部は欠損する。受け部は短く、断面は鋭い三角形状を呈する。受け部上面には焼成時に付着した蓋の端部がごく僅かに残存する。内外面とも回転ナデ調整、色調は内外面が灰色、断面が赤灰色、焼成は良好堅緻、受け部より下部は高温のため、器壁がガラス化している。残存率は受け部10%以下である。(6)は受け部から环部上半部が残存する。立ち上がりは内側に直線的に伸びる。端部は欠損する。受け部は短く、断面三角形状を呈する。受け部上面には



第7図 1次調査出土遺物実測図 (1:4)



第8図 2次調査出土遺物実測図 (1:4)

焼成時に付着した蓋の端部がごく一部残存する。内外面とも回転ナデ調整、色調は内面が灰色、外面が灰色～暗灰色、焼成は良好堅緻、残存率は受け部20%である。(5)・(6)いずれも出迎編年のMT15～TK10併行期に該当し、6世紀前半～中葉頃と思われる。(7)は弥生土器高坏である。第3トレンチ¹³より出土した。坏部と接合する脚部上半のみ残存する。脚部は外方向に外反しながら開く。内面はナデ調整、外面は縱方向のハケ調整である。外面に赤色顔料が明瞭に付着する。色調は内面が褐色、外面が赤褐色(赤色顔料部分)～にぶい黄褐色、断面がにぶい赤褐色を呈する。焼成は良好、残存率は脚部の接合部のみ100%である。(8)・(9)は弥生土器壺である。いずれも第3トレンチビット2より出土した。(8)は頸部から体部半ばまで残存する。口縁部は欠損する。頸部は明瞭に屈曲する。体部は弧を描き、下部へいくにつれ器壁が薄くなる。下半には二次焼成による煤が付着する。内面は頸部接合部より上側が横方向のナデ調整、体部は縱方向のケズリのちハケ調整で、部分的に指サエの痕跡が残存する。外面は頸部から体部上半は横方向のナデ調整、体部は斜め方向のハケ調整である。色調は内外面ともににぶい黄褐色～にぶい橙色を呈する。焼成は良好、残存率は頸部接合部で20%である。弥生時代後期後半と考えられる。(9)は底部から体部の一部のみ残存する。底部から体部への屈曲は明瞭である。外面に縱方向のハケのちナデ調整、内面はナデ調整が確認できる。色調は内面がにぶい黄褐色、外面がにぶい黄褐色～橙色を呈する。焼成は良好、残存率は底部10%である。

第3節 まとめ

【第1次調査】 第1トレンチにおいては土手状遺構を検出した。昨年度調査で確認した旧境内西面中門北側の土手状遺構が中門南側まで続くことが判明した。

【第2次調査】 各トレンチともに土手状遺構を検出した。旧境内北面でも土壙状の土手が存在していたことが明らかになった。また第3トレンチについては、土手状遺構下層で弥生時代の包含層およびピットを確認した。遺物は、包含層およびピットから須恵器(古墳時代～古代)と弥生土器を検出した。

以上のように平成16年度は普通寺が昨年度に引き続き石造物設置を行う計画があったため、それに伴う小規模な確認調査を行った。

2年にわたる調査で、旧境内の北面・西面・南面を取り壊すように土壙状の土手が存在していたことが確定となった。旧境内東面の調査は実施していないが、おそらく旧境内四周に土手状遺構が巡るものと推定できる。土手状遺構の年代については、昨年度の調査で上層を中世後半、下層を中世前半と位置付けている。今年度の調査では調査区が小規模だったこともあり遺物の出土量が少なく時期の確定には至らなかったが、概ね昨年度調査と同様の年代と考えて差し支えないであろう。

また昨年度旧境内西面北部で弥生時代の包含層を確認していたが、今回第3トレンチで同じく弥生時代の包含層が検出され、新たに同時代の遺構(ピット)も検出している。他の第1トレンチ・第2トレンチにおいても二次的な堆積による弥生土器を含む上層が確認されることから、旧境内北部全体にわたり弥生時代の包含層が存在していた可能性が高い。弥生時代に当地に集落等何らかの人为的痕跡があったことは確実であろう。さらに、昨年度第2次調査で古墳時代と思われる遺構を確認している。今年度第2次調査でも包含層およびピットから古墳時代から古代の須恵器を検出しており、古墳時代～古代の遺構があった可能性がより強くなつた。

これらのことから普通寺旧境内地は、普通寺創建以前から永続的に集落が営まれていたことが窺える。

第3章 善通寺陣所跡

第1節 調査の経緯と経過

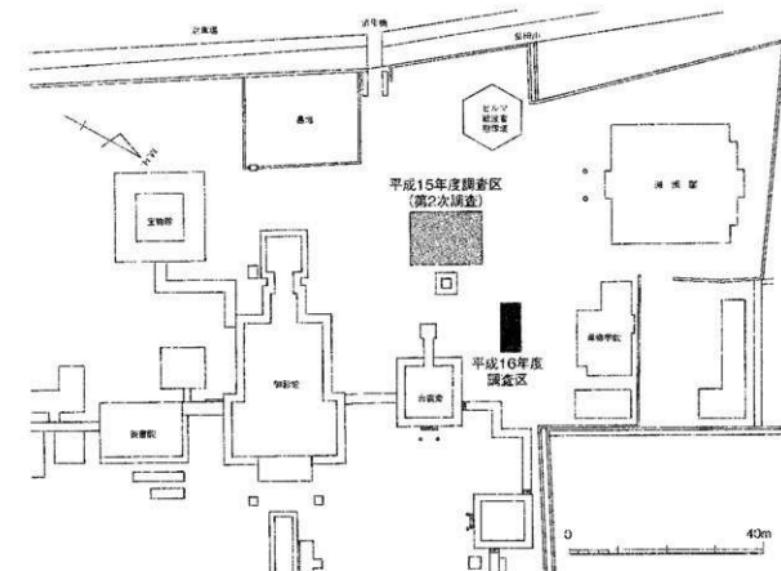
鈴本山善通寺は平成18年に創建1200年を迎える。それに伴い昨年度より境内整備が進められており、善通寺西院(誕生院)でも建物の建設が予定されている。当該地は善通寺陣所跡と称され周知の埋蔵文化財包蔵地として認知されている。本遺跡は寛文3(1663)年に香西成資によって作成された[南海治乱記]に、阿波國の三好実休が香川氏征討のため、長禄元(1558)年、金蔵寺に本陣を構え(金蔵寺陣所)、さらに軍勢を進めて善通寺に陣所を移したという記載が見られる。この陣所跡が現在の善通寺西院と伝えられている。

昨年度は建物建設が計画されている西院南東隅(第1次調査)と北東部(第2次調査)で確認調査を実施した。第1次調査では、中世後半から近世にかけての溝、ピット、土坑を検出し、瓦・土器が出土した。第2次調査では、7世紀末から8世紀に遡る大規模な溝状造構を検出した(第9図)。

今回調査地はその北東にあたる。当地で納骨堂建設が計画されたため、確認調査を行うこととなった。



第9図 調査区位置図 (1:5,000)



第10図 調査区配置図 (1 : 1,000)

調査日誌(抄)

7月1日(木) 天候:晴

調査区の設定を行う。調査区付近の木材・石材等の移動をする。調査区付近に基準点を設置する。道具の準備をする。

7月5日(月) 天候:晴

午後から機械掘削を行う。調査区に大きな木根があり、調査区全体を掘削することが困難である。調査区の西半分の掘削を終えた。

7月6日(火) 天候:晴

午前中は調査区東部の機械掘削を行う。南壁に側溝を掘る。

7月7日(水) 天候:晴

南壁・東壁の側溝掘りを行う。かなり暑い。

7月8日(木) 天候:晴時々雲

調査区内部の遺構面積全をする。南壁・東壁の分辯をする。

7月9日(金) 天候:晴時々雲

引き続き遺構面積全を行う。検出した遺構を割る。土層断面図・平面図を作成する。

7月12日(月) 天候:晴時々雲

調査区西部を重機で深掘りする。納骨堂工事掘削の範囲である地下3mの範囲まで掘削する予定であったが、礫層になり漏水してきたため土層確認は2m付近までにとどめる。埋め戻しを行った。遺構の片づけをする。

7月13日(火) 天候:晴時々雲

遺構図面などの整理を行う。水洗等出土遺物の整理をする。

7月14日(水) 天候:晴時々雲

遺構図面などの整理を行う。水洗等出土遺物の整理をする。

7月15日(木) 天候:晴時々雲

遺構図面などの製作を行う。

第2節 調査の成果

①基本層序

調査地は、西院(誕生院)北西部、御影堂北の忠惠院と専修学院の間に位置する(第10図)。平成15年度に調査を行った聖天堂再建予定地の北東にある。調査区は納骨堂建設予定地内に任意で東西10m×南北4mのトレンチを設定した。

基本層序は、表土・搅乱を除くと2層に大別できる(第11図)。第1層は近代の堆積層で、土層③～⑥が該当する。第2層は基盤層(造構面)で、土層⑦が該当する。さらに下層は、確認のため調査区東側部分を深掘りしたが、砂層および粗砂層(湧水層)(土層⑪・⑫)が確認されたのみで、人為的な痕跡は確認できなかった。

②遺構・遺物

調査区のはば半分が木板で覆われており、検出した遺構はごく僅かである(第11図)。

第1層上面からは近・現代の骨蔵器を大量に含む土坑(土層⑨)と、東壁北端と北壁で建物の基礎と思われる石列(土層⑩)を検出した。

第2層(基盤層)上面からは、土坑3基、ピット5基を検出した。埋土や出土遺物の状況から判断して、近・現代の遺構は土坑1、土坑2、ピット3である。土坑1、土坑2からは近・現代の瓦・骨蔵器が出土した。ピット3にも骨蔵器が埋納されており、中には火葬骨が残存していた。

近世以前の遺構としては、土坑3、ピット1・2・4・5が挙げられる。土坑3は、東西1.1mを測る。南北は雨樋にかかるため規模は不明である。隅丸方形を呈すことから柱穴であった可能性がある。埋土は、黄土混凝灰質土で、平瓦が1点出土した。破片であるため時期の確定は困難であるが、おそらく中世頃の所産であると考えられる。ピット1は、直径0.3mの円形を呈す。埋土は炭化灰色で、遺物は出土しなかった。ピット2は、直径0.35mの円形を呈す。底部には平石が据えられている。埋土は、褐灰粘質土である。ピット4・5は南壁西部断面で検出した。土層⑪・⑫に相当する。埋土はピット2と同じく褐灰粘質土である。遺物は出土しなかった。

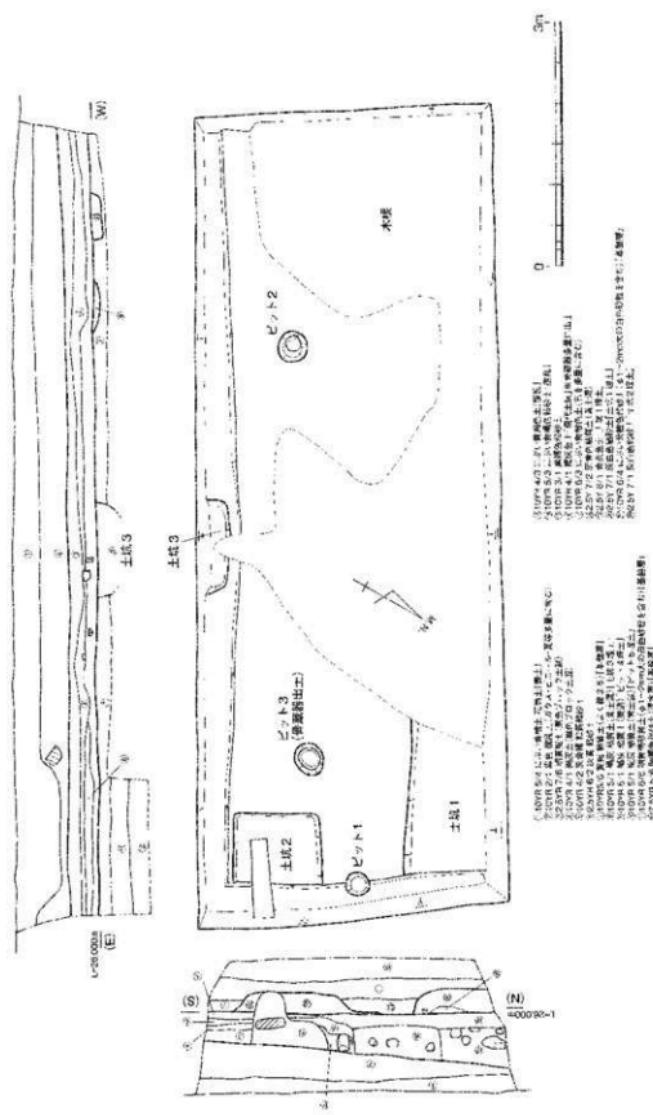
第3節 まとめ

調査地は普通寺跡所跡の北西部に該当する。当初想定していた中世後半の陣所跡に関する明確な遺構・遺物は発見できなかった。しかし、近・現代の上層より下層面で、土坑、ピット等の遺構を僅ながら検出しており、近世以前に何らかの人為的痕跡があった事は明らかである。

また隣接する平成15年度2次調査では、古代に遡る大規模な溝状遺構を検出している。溝状遺構はその位置から多度郡三条と四条の境構の可能性が高い。そのため、今回の調査でも関連する遺構が検出されることが予想されたが、当該時期の明確な遺構・遺物は検出されなかった。

今回の調査区は面積が狭小なこともあり、今後周辺の調査事例の増加により、当遺跡の全貌が明らかになることを期待したい。

第11図 調査区平・断面図(1:60)

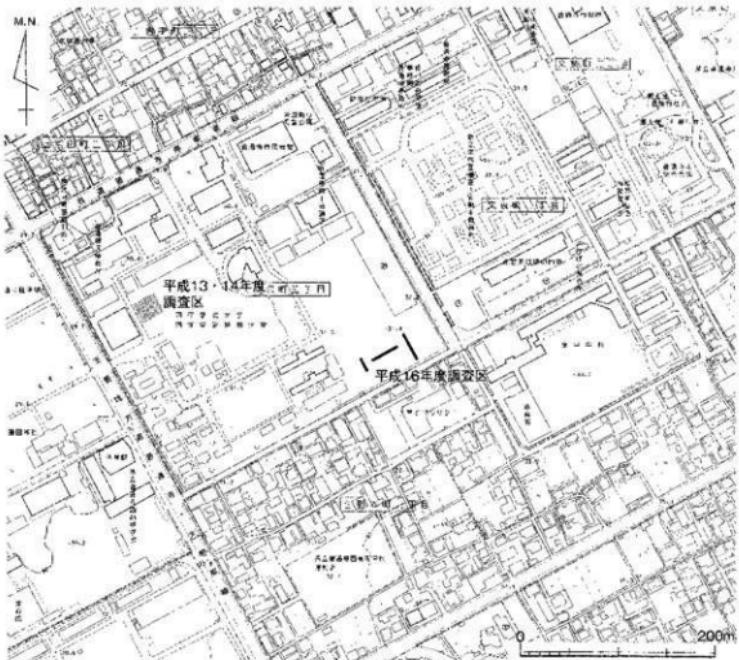


第4章 四国学院大学構内遺跡

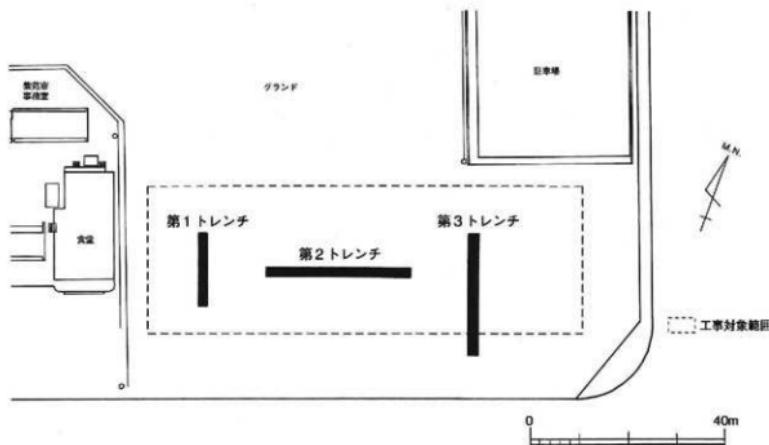
第1節 調査の経緯と経過

調査地は、四国学院大学の構内東南隅に位置する。近辺では、同じく構内のグラウンド(通称キャンパス)部分を平成13・14年度に渡り市教育委員会が調査し(第12図)、6世紀末から8世紀初頭にかけての集落跡を検出している(海澄2002、海澄・渡邊ほか2003b)。遺構は、掘立柱建物、堅穴住居、溝状造構(条里網溝と推定される)が挙げられる。遺物は、土師器煮沸具、須恵器供膳具、貯蔵具、円面鏡、瓦等が出土した。さらにその東側約60mの地点では四国学院大学友愛館(5号館)建設に伴い昭和51・52年に調査を行っている。未報告であるため詳細は不明であるが、6~7世紀の堅穴住居や溝、土器溝りが検出され、流路内より円面鏡が出土した。遺構・遺物の内容から平成13・14年度の調査区と同一の遺跡の範囲内であると捉えることができる。また大学北東に隣接する市民会館では、建物建設時に土器等の遺物が表採されており、遺跡の存在が推測できる。

このように周辺に遺跡が点在する状況で、当地に学生支援センター(仮称)の建設が計画された。市教育委員会では当地の立地の重要性に鑑み、隣接する遺跡の広がりを把握するため、確認調査



第12図 調査区位置図(1:5,000)



第13図 トレンチ配置図(1:1,000)

を行うこととした。

調査方法は、該当地に任意で東西・南北方向に合計3ヶ所帶状のトレンチを設定した(第13図)。基盤層まで掘削し、土層断面の観察、写真撮影、縮尺20分の1での図化を行った。また基盤層より下層の堆積状況を確認するため部分的に深掘りを行い状況把握に努めた。

調査日誌(抄)

12月3日(金) 天候: 晴

調査区周辺の水準点測量を行う。調査区の設定をする。

12月6日(月) 天候: 晴

重機掘削を行う。1~3トレンチともに砾層(川原石)・砂層が厚く堆積しており、調査地が氾濫原である可能性が高い。3トレンチについては、南側で一部締まった面がみられたため、その部分をさらに南へ10m拡張する。

12月7日(火) 天候: 曇

1トレンチの壁面整形、および写真撮影・実測(断面)を行う。

12月8日(水) 天候: 曇

2トレンチの壁面整形、および写真撮影・実測(断面)を行う。県文化行政課の佐藤竜馬氏來訪。

12月9日(木) 天候: 晴

3トレンチの壁面整形を行う。拡張部分については平面精査を行う。平面図・断面図を作成する。

12月10日(金) 天候: 晴

埋め戻しを行う。3トレンチについては確認のため南端で工事予定の掘削深度まで掘り下げる。道具の片づけをし、撤収する。



第14図 作業風景

第2節 調査の成果

①基本層序

上層は、各トレンチともに大きく3層に分層される(第15図)。第1層は表土である。第2層は、炭層で旧陸軍時代の堆積層と考えられる。第3層は、礫層および砂層で河川の堆積土である。

第2層の炭層は、各トレンチに水平に堆積している。戦前、普通寺には旧陸軍第十師団が設置されており、当調査区には騎兵隊が配置されていた。明治40年に騎兵隊の兵舎が大火で焼失したとの記録があり、炭層はこの時のものではないかと推測される(註1)。

第3層礫層・砂層は、第2層直下より掘削床面まで、約0.5~1.0mにわたり厚く堆積している。礫層・砂層の様・砂粒の大きさは層によって大小様々であり、長時間水流の摩滅を受け、形状は丸みを帯びている。礫層と砂層が互層になり、多方向へ地表面を繰り返し侵食し堆積している状況が、各トレンチの断面から窺える。

②遺構・遺物

第2トレンチ断面、第3トレンチ平・断面において、第2層直下より、ビットおよび方形土坑を検出した。いずれも埋土は炭を含んでおり、騎兵隊の時期の構造物柱穴や基礎の痕跡と推測される。

その他近世以前に通る遺構は全く検出されなかった。河川の土砂が厚く堆積していることからこの付近一帯は長年にわたって河川の氾濫原であったためと考えられる。

遺物については、全く出土していない。

第3節 まとめ

今回の調査では、調査区周辺で検出された古代の遺構・遺物は検出されなかった。前述のとおり、調査区一帯が河川の氾濫原であったため、集落のなかでもこの付近は住居跡等の遺構密度が希薄であったか、若しくは集落の範囲外であった可能性が高い。河川の流路は、各トレンチの断面をみても、数回にわたり大規模な氾濫を繰り返しており、流路の方向は多方向によぶ。

また、今回の調査区の南約300mには生野町遺跡・生野南口遺跡が立地する(第2図)。両遺跡では7世紀後半から8世紀前半の棚列・建物群・堅穴住居・条里耕作・土坑などが検出されている(岡本1993、佐藤2003)。四国学院大学構内遺跡にほど近く、同一の微高地にであることから、同じ遺跡群である可能性が考えられる。

大学構内での遺跡の残存範囲と周辺遺跡の位置関係、および残存する旧河道の痕跡を考え合わせると、今回検出した旧河道は平成13・14年度調査区および昭和51・52年度調査区の東側に沿って南東から北西方向に流れていたと推測できる。今後、大学構内遺跡ならびにその周辺の集落遺跡の広がりや利用状況を把握するうえで、有益な情報となり得るであろう。

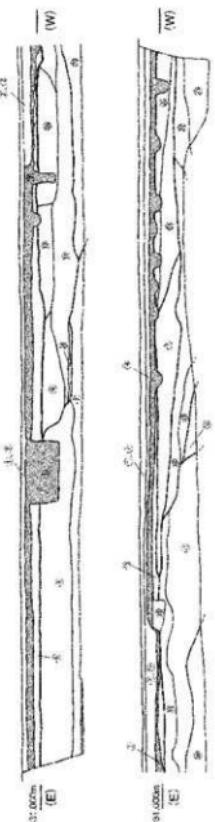
註1 香川縣文化行政課 佐藤竜馬氏よりご教示頂き、当時の新聞記事(香川新聞明治40年3月3日付記事)の写しを賜った。それによると、「普通寺騎兵第十師団司令官第七連隊内第三中隊に相当する第五連隊は昨日午前一時五十分頃の西北部より炎上し、當時西風吹込み見る見る火は一間に擴がり前行四十三・開渠行六門の該倉金焼し…」とあり、騎兵隊馬舎で火災があったことが窺える。全焼した第五号馬舎は騎兵第十一連隊配属団(香川県教育委員会2005)によると現在の大学立体駐車場部分に位置し、今回の調査区にほど近い。

第1トレーナー西壁

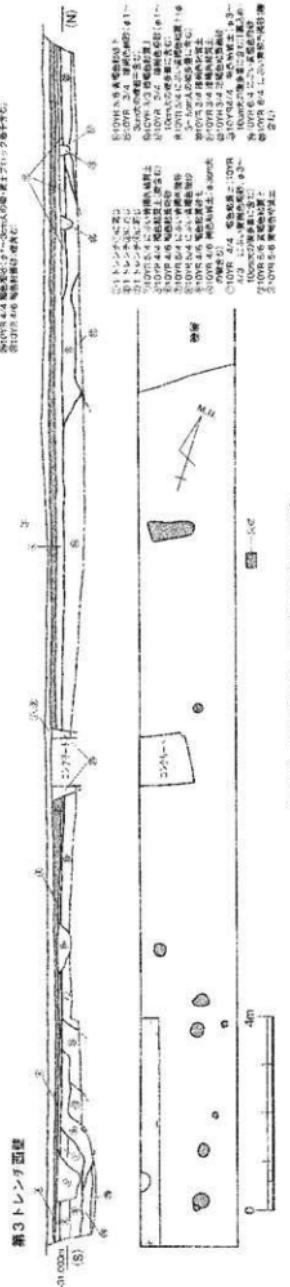


第1トレーナー西壁
第1トレーナー西壁は、主に2層構成である。下部は、厚さ約10mの「A」層で、上部は、厚さ約5mの「B」層である。
「A」層は、主に砂岩と頁岩の互層で構成され、一部に泥岩や粘土岩が混在する。
「B」層は、主に砂岩で構成され、一部に頁岩や泥岩が混在する。
「C」層は、主に頁岩で構成され、一部に砂岩や泥岩が混在する。
「D」層は、主に泥岩で構成され、一部に砂岩や頁岩が混在する。
「E」層は、主に砂岩で構成され、一部に頁岩や泥岩が混在する。
「F」層は、主に頁岩で構成され、一部に砂岩や泥岩が混在する。
「G」層は、主に泥岩で構成され、一部に砂岩や頁岩が混在する。
「H」層は、主に砂岩で構成され、一部に頁岩や泥岩が混在する。
「I」層は、主に頁岩で構成され、一部に砂岩や泥岩が混在する。
「J」層は、主に泥岩で構成され、一部に砂岩や頁岩が混在する。
「K」層は、主に砂岩で構成され、一部に頁岩や泥岩が混在する。
「L」層は、主に頁岩で構成され、一部に砂岩や泥岩が混在する。
「M」層は、主に泥岩で構成され、一部に砂岩や頁岩が混在する。
「N」層は、主に砂岩で構成され、一部に頁岩や泥岩が混在する。
「O」層は、主に頁岩で構成され、一部に砂岩や泥岩が混在する。
「P」層は、主に泥岩で構成され、一部に砂岩や頁岩が混在する。
「Q」層は、主に砂岩で構成され、一部に頁岩や泥岩が混在する。
「R」層は、主に頁岩で構成され、一部に砂岩や泥岩が混在する。
「S」層は、主に泥岩で構成され、一部に砂岩や頁岩が混在する。
「T」層は、主に砂岩で構成され、一部に頁岩や泥岩が混在する。
「U」層は、主に頁岩で構成され、一部に砂岩や泥岩が混在する。
「V」層は、主に泥岩で構成され、一部に砂岩や頁岩が混在する。
「W」層は、主に砂岩で構成され、一部に頁岩や泥岩が混在する。
「X」層は、主に頁岩で構成され、一部に砂岩や泥岩が混在する。
「Y」層は、主に泥岩で構成され、一部に砂岩や頁岩が混在する。
「Z」層は、主に砂岩で構成され、一部に頁岩や泥岩が混在する。

第2トレーナー南壁



第3トレーナー西壁



第15図 調査区平面・土壁断面図(1 : 100)

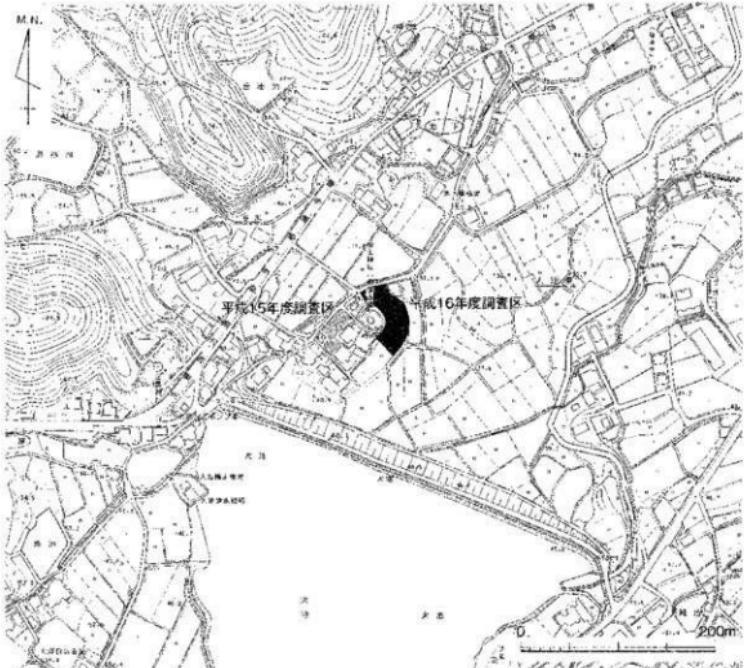
第5章 菊塚古墳

第1節 調査の経緯と経過

菊塚古墳は戦前から丸龜平野屈指の巨良墳と認識はされていたものの、発掘調査が行われ詳細が判明したのは、近年のことである。調査以前は盾形の周底帯の存在から中期古墳とする説や後期古墳と考える説が並立していた。

平成12年度調査 菊塚古墳において周辺地の整備工事の計画に伴う照会が普通守市教育委員会にあった。古墳周辺の工事は水路や畔田の改修を中心で、現存する墳丘への影響は無いが、周底帯の痕跡と推定できる地割りへの影響が想定されたため、墳丘南東側の水田を中心に確認調査を実施した。調査の結果、周底帯は基盤層を削り出して構築していることを確認したことや、後円部断面を検出することができた。

平成13年度調査 以前より墳丘の流出が確認されていたが、墳頂部の廟上神社に通じるコンクリート製舗装路の下部の空洞化などが確認され、安全面から改修が急務であった。現状のまま放置すると、墳丘自体が崩壊する恐れがあったため、保存を前提とした墳頂部の道構の確認調査を



第16図 調査区位置図 (1 : 5,000)

行った。併せて後円部墳丘の測量調査も実施した。その結果、調査前不明であった主体部が南に開口する横穴式石室であることが判明した。また石室内には、中四国では王墓山古墳に次いで2例目となる石室形を検出した。後円部の測量の結果、直径39m前後の規模になることが分かった。

平成14年度調査 前年度の調査を踏まえ、玄室全面および羨道の一部の調査を行った。その結果、石室は石室形を有する両袖式横穴式石室であることを確認した。遺物も盗掘を受けていたものの、玄室を中心に多数の遺物が出土した。

石室は後円部のはば中央部に位置する。奥壁が後円部のはば中心にあたり、奥壁の位置が墳丘の設計にも大きく影響していたと考えられる。石室形態は羨道が狭く袖部が内側に突出しているなど、九州型横穴式石室の影響を受けた可能性がある。また石室形の存在は、菊塚古墳の性格を考える上で最も顕著な遺構である。石室形の位置は、王墓山古墳とは異なり奥壁側に据えられている。この形態は肥後地方にある通有の石室形の形態と言える。

遺物は大部分が玄室内から出土した。出土遺物は、須恵器・土師器などの土器類、耳環・ガラス製小玉・水晶製切子玉・碧玉製勾玉などの装飾品、杏葉・鏡板・辻金具・鏡などの馬具類、鉄綱・石突・鉄刀・刀子・鉄鏃などの鉄製品と多種多様である。また出土須恵器の年代より菊塚古墳の築造時期が、おおよそ6世紀中葉頃に該当することも判明した。

平成15年度調査 墳丘の形状を把握するために前方部端の検出を試みた。2次にわたる調査で前方部北側および西側に計10本のトレンチを設定した。調査の結果、前方部長25m、墳丘長64mの前方後円墳であることが判明した。また前方部西側前端では基盤層を割り出した幅5.5mの周溝を検出し、これまで周溝のみと考えられていた墳丘復元を変更する必要が生じた。なお、後世の削平のため詳細な墳丘の形態を確定させるまでには至らず、今後の課題が残った。

市教育委員会は遺跡の重要性を考慮し、関係諸機関と協議の上、埋蔵文化財調査事業として保存を前提とした遺構の確認調査を行った。

現地調査については市教育委員会担当者を調査員として実施するとともに、四国学院大学考古学研究部・四国学院大学学生および地元作業員が参加した(個別氏名は例省に記した)。

調査は昨年度までの成果を踏まえて、墳丘形態、規模の確認および遺構の残存状況を把握するため、後円部裾推定部分にトレンチを設定した。調査面積は計50.7m²である。調査期間は平成16年11月1日から同年11月30日まで行った。整理期間は調査中から適宜行い、平成17年3月31日に終了した。

第2章 調査の方法

調査は後円部裾が残存していると考えられる古墳南側および東側にトレンチを設定した。

計5本のトレンチを設定し、遺構の検出に努めた。調査区は現況において更地および荒蕪地となっている。トレンチは最も遺構が把握できるように長さ、幅ともに全て任意である。作業効率のため適宜、平面および断面の観察・縮尺20分の1での図化・写真撮影を行いながら下層の剥離に努めた。

調査日誌(抄)

11月1日(月) 天候: 曇のち晴

1~4トレーナーの設定をする。基盤杭に標高をおとす。1トレーナーの表土剥ぎを行う。

11月2日(火) 天候: 晴

1~3トレーナーの調査。2トレーナーは、表土を剥いだところ、北東に隣接する井戸の洗い場と思われるコンクリートを平面で検出したため、下層の調査を断念する。

1トレーナーは、墳丘側に1.5m拡張する。墳頂側から墳丘縁に向かって疊混黄色土の落ちがみられる。基盤層・盛土・盛土出土のいずれなのかを検討。

3トレーナーは、表土を剥いだ後、墳丘側で基盤層と思われる黄色土を検出。その上層に部分的に赤土(焼土か?)が堆積する。



第17図 作業風景

11月4日(木) 天候: 晴

1トレーナーは、墳丘の落ちのラインを確定させため、側溝を下げ断面および平面での土層堆積状況の把握に努める。平面で周濠埋土と推定される砂疊混黒色土との境を確定し、写真撮影する。

3トレーナーは、墳丘側に10mトレーナーを拡張する。昨日検出した赤土(焼土)はドーナツ状に広がり、埋土には土器・焼土の塊・炭などがあることから、竈ではないかと考えられる。その付近から東へ向かって基盤層の落ちを側溝断面で確認する。

11月5日(金) 天候: 晴

1トレーナーは、側溝断面で墳丘側に堆積した疊混黄色土の下層に疊混黄灰砂質土を確認する。2層ともに墳丘側に統くことから、基盤層であると判断できる。周濠埋土と推定される砂疊混黒色土をこの土層まで除去する。

3トレーナーは、竈を平面精査したところ焼土の

梢円が二つ連なることから砂疊竈であると推定される。写真撮影・実測を行う。側溝で墳丘掘の堆積土を除去する。基盤層直上には黑色腐植土が堆積しており、土層下部より土器把手を検出した。香川県文化行政課松本和彦氏が来訪。土器の年代等について御教示いただく。

元興寺文化財研究所角南聰一郎氏より砂疊竈の資料を送付していただく。

11月8日(月) 天候: 晴

1トレーナーは、先週に引き続き周濠埋土と推定される砂疊混黒色土を除去する。トレーナー端より25mあたりまでは、基盤層である疊混黄灰砂質土の上に暗紅粘土が薄く堆積する。基盤層直上まで全て除去した段階で写真撮影する。

3トレーナーは、砂疊竈の完掘を行い、写真撮影後裁割を行う。その後周濠埋土と考えられる黒色腐植土上面まで掘削する。

11月9日(火) 天候: 晴

1トレーナーは東西壁の土層断面図を作成する。3トレーナーは、基盤層の落ちが周濠になるかどうか確定するため、東側へ5.0m拡張する。

4トレーナーは、耕作土の除去を行う。側溝で土層の堆積状況を把握する。

11月10日(水) 天候: 晴

3トレーナーは、引き続き拡張部分の表土を除去する。側溝で土層の堆積状況を把握する。

4トレーナーは、耕作土直下黒灰粘土上面まで掘削した後写真撮影をする。

11月11日(木) 天候: 雨のち曇

午前中は、雨天のため作業中止。室内で図面・写真の整理を行う。

午後は、3トレーナーの北隣に3'トレーナーを設定するため該当箇所にある廃土を除去する。

3トレーナーの壁面精査をする。墳丘掘部分はやや窓がある。土器把手はこの窓の埋土から出土したものと考えられる。

4トレーナーは、墳丘側に1.5m拡張する。

11月12日(金) 天候: 晴

3・3'トレーナーは引き続き廃土を除去した後、3'トレーナーの設定を行う。(15×5.5m)表土を除去する。

4トレーナーは、拡張部分を基盤層の面まで掘削する。

香川県埋文センター中里伸明氏が来訪。

11月13日(土) 天候: 晴

3' レンチの耕作土を除去する。墳丘側で南北方向に走る溝を検出。近現代の瓦がぎっしり詰まっており、暗渠ではないかと考えられる。3' レンチは墳丘裾の傾斜部分が砂糖甕で搅乱を受けていたが、3' レンチは緩やかに傾斜していくのが平面で確認できる。

11月15日(月) 天候: 雨のち曇

午前中は、雨のため作業中止。室内で図面・写真等の整理を行う。

午後は、各レンチの水抜きおよび3' レンチ北壁東側部分の崩落箇所廃土の除去、3' レンチの墳丘裾堆積土上面までの掘削を行った。

4' レンチは、拡張部分の表土を除去する。

11月16日(火) 天候: 晴

4' レンチは、基盤層の面まで拡張部分の掘削を行う。

3' レンチは、基盤層直上の黒灰粘土を除去する。黒灰粘土下層には多量の木片が埋没していた。(一部取上げ)

徳島文理大学助教授大久保徹也氏来訪。葺石・埴輪の有無、墳丘外部施設の状況などから菊塚の年代観について御教示いただく。



第18図 作業風景

11月17日(水) 天候: 晴

3' レンチは、墳丘裾溝埋土の掘削をする。埋土下層より土器片が出土する(弥生土器か?)。

3' レンチも墳丘裾溝埋土の掘削をする。同じく埋土下層より土器片が出土する(弥生土器か?)。

香川県理科センター片桐孝浩氏・信里芳紀氏來訪。墳丘裾溝埋土と基盤層直上粘土層との前後関係(切り合い)や3' レンチと1'・4' レンチの堆積層の関係について御教示いただく。丸亀市教育委員会大野宏和氏來訪。

11月18日(木) 天候: 曇時々雨

現場の作業は休みとする。室内で土器洗い等を行う。

11月19日(金) 天候: 曇時々雨

現場の作業は休みとする。室内で土器洗い等を行う。

11月20日(土) 天候: 晴

3' レンチは、墳丘裾の溝状造構埋土の掘削を行う。除去後、3' レンチ・4' レンチと合わせて写真撮影をする。3'・3' レンチの土層断面図を作成する。

11月22日(月) 天候: 晴

3'・4' レンチの土層断面図、2' レンチの平面図を作成する。県文化行政課松本氏來訪。

11月23日(火) 天候: 晴

土層断面図を作成する。大川広域行政事務組合松田朝由氏・琴南町教育委員会加納弘之氏來訪。

11月24日(水) 天候: 晴

土層断面図・平面図の作成を行う。平面図にレーベリングする。

11月25日(木) 天候: 晴

3' レンチ砂糖甕の断面図を作成する。竪床面炭層の土をサンプリングする。調査区の埋め戻しを行う。

11月26日(金) 天候: 晴のち曇

調査区を埋め戻し、調査完了。道具の片づけをする。

11月27日(月) 天候: 晴

図面・写真等の整理を行う。

11月28日(火) 天候: 晴

図面・写真等の整理を行う。

第3節 古墳の立地

菊塚古墳は普通寺市街地から南西側に広がる丘谷地区に位置する。この地区は有岡地区とも呼ばれており、低丘陵地帯が広がっている。この地区は有岡大池を水源とする弘田川上流域に該当し、多くの首長墳級の前方後円墳が集中する地域として著名である。この地は古代から聖域視されていたようで、集落遺跡があまり検出されない反面、青銅器埋納遺跡や祭祀遺跡、墳墓などが多く見つかっている(第2図)。

この地域は北側から西側にかけて、五岳山の一角である香色山(標高1532m)、筆ノ山(標高2960m)、我抒御山(標高4810m)が連なっており、南側は丸龜平野の独立峰では最も高い大麻山(標高616.3m)の裾野が広がり、西側の平野方向のみが開ける地形となっている。これらの山々の尾根上には前期古墳が点在し、標高50~80mの山裾部には後期から終末期の群集墳が密集している。また平野部にも舌状に伸びる小丘陵が点在しており、その地形を利用して多数の古墳が築造されている。

菊塚古墳は、これらの平野部に広がる古墳のうち最も西側の平地に独立して築造されている。古墳は簡墳や住宅建設に伴い前方部の大半が消滅しており、菊理姫命を祀る菊主神社がある後円部のみが辛うじて残存しているに過ぎない。その後円部さえも周囲は大きく崖状に削平されるなど地形の変化が著しい。一方圓場整備前の航空写真を観察すると、古墳の周囲には周庭帯の痕跡と推定される平面橋状の地割りが認められる。この部分は墳丘南側では西から東にかけて階段状に低くなっている、その比高差は0.7mを測る。墳丘の主軸は南西→北東方向を向いている(付図)。

墳丘の全長は推定で約59m、後円部直徑約39m、周庭帯の全長は約90m、最大幅約70mを測り、丸龜平野でも屈指の規模を誇る。

第4節 調査の概要

菊塚古墳後円部墳丘の範囲については、平成12年度の墳丘掘の調査、平成13年度の墳丘測量調査、平成14年度の主体部の調査での結果を総合して、玄室奥壁中心を基点に約直徑39mの円弧に復元できる(平成15年度報告書墳丘復元案参照)。しかし、墳丘掘山体の調査は平成12年度において後円部南側にトレーンチを1ヶ所設定したのみで、他の部分について発掘調査は行われていなかった。

そこで今年度は後円部墳丘裾の確定を目的に、発掘調査が可能な後円部南側および東北部にかけて合計5本のトレーンチを設定し範囲の把握につとめた。トレーンチの設定は、墳丘復元案を参考に、墳丘中軸線に直交する南側に第1トレーンチ、東に45度振った地点に第2トレーンチ、中軸線上東側に第3トレーンチ、第3トレーンチより0.5m北に第3'トレーンチ、中軸線より北に45度振った地点に第4トレーンチをそれぞれ設定した(第23図)。各トレーンチの規模は、調査開始時は1.5×5.0mであったが、その後調査の状況に応じて適宜拡張している。

第5節 調査の成果

①遺構

第1トレンチ トレンチの規模は、 $1.5 \times 6.5m$ を測る。土層は4層に大別できる。

第1層は表上で土層①～③が該当する。黒色粘質土で、近・現代の瓦・土器が多く含む。上層②の上面より直径0.8mの円形土坑が検出された。近・現代の土器・瓦が大量に出土したことから近・現代の施業土坑であると考えられる。

第2層は、上層⑤・⑥が該当する。基盤層出来と推測される風化した礫を含む堆積土である。

第3層は上層⑦・⑧が該当する。基盤層直上に堆積した粘土層である。

第4層は基盤層である。土層⑨・⑩が該当する。砂礫層である。トレンチ北端より1.25mの付近で北から南へと下方に落ちている。この傾斜が基盤層削り出しの墳丘裾部分であると推定される。

第2トレンチ トレンチの規模は、 $1.5 \times 5.0m$ を測る。表土を除去した段階で、コンクリートや煉瓦で区画された構造物が検出された。調査区北西には近・現代の井戸口が隣接しており、検出した遺構は井戸口の洗い場であったと考えられる。除去が困難であるため、当トレンチにおける下層の調査は断念した。

第3トレンチ トレンチの規模は、 $1.5 \times 11.0m$ を測る。土層は、6層に大別される。

第1層は、近・現代の耕作土・床上である。土層①・⑦が該当する。近・現代の土器・瓦を多く含む。トレンチ西端土層⑦上面で焼土の範囲を検出した。ドーナツ状の平面格円の焼土が東西に2つ連なっている。各焼土坑の埋土からは、炭・焼土・土器・瓦が検出された。遺構の形態や土層・出土遺物の状況から砂糖甕であると判断した。西端側より順に砂糖甕1・砂糖甕2と呼称する。砂糖甕1は最大横幅1.2m、砂糖甕2は最大横幅0.8mを測る。炊き口は2基とも南側に配備する。2基とも甕内埋土は、焼土・炭混じりの暗灰粘質土で、底部は炭が堆積している。周囲は被熱のため赤く変色し硬化している。また甕は、土坑状の穴を掘り据え付けている。掘形の底面には灰褐色土を敷いている。

第2層は、近代以前の堆積土である。砂糖甕東にあたる部分は、数回にわたり整地しており(土層⑧・⑨～⑫)、さらに東側は水平に堆積している(土層⑬・⑭)。風化礫を含む。

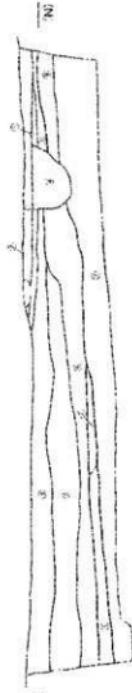
第3層は、2層よりさらに前段階の堆積土である。遺物が出土していないため時期の確定は困難である。土層⑯・⑰が該当する。礫を含み、水平に堆積する。

第4層は、墳丘崩落土である。墳丘基盤層崩落土は土層⑯が該当する。基盤層山稟の黄土ブロックを含む。墳丘盛土崩落土は土層⑯・⑯・⑮が該当する。墳丘裾の傾斜部分に西から東へ下る様に堆積する。⑯より弥生土器破片が出土した。

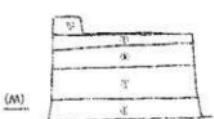
第5層は、墳丘裾から周庭にかけての基盤層直上の堆積土である。土層⑯が該当する。黒色粘土(腐植土)で水平に堆積する。底部より大量の木片が検出された。木片は加工されていない自然木で枝の部分がほとんどである。おそらく墳丘・周堤若しくは周濠外周辺に植生していた樹木の枝が、周庭に落ち込んだものであると考えられる。

第6層は、基盤層である。墳丘から墳丘裾にかけては黄褐色粘質土(土層⑯)、周庭は緑灰色粗砂(土層⑯)となる。トレンチ西端から3.3m東の地点で西から東へ下る。さらにトレンチ西端から6.1m東の地点で東上方へ上がり、そのまま東へ平坦な面が続く。つまり、基盤層削出しの墳

第1トレンチ



第2トレンチ

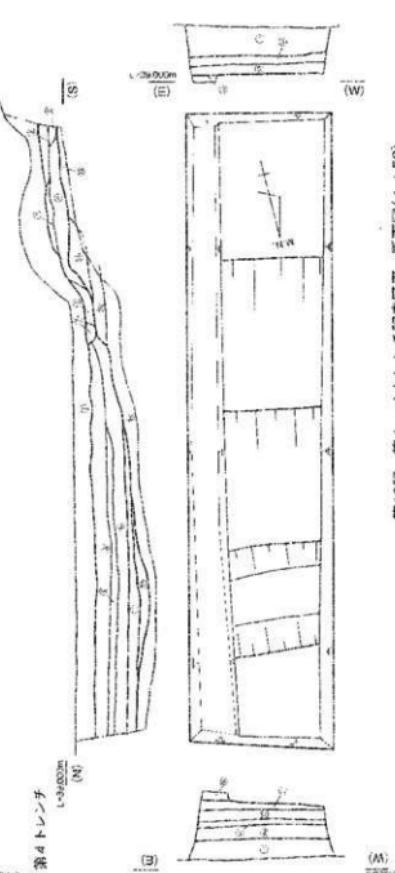


1915.2 開拓地は土壌で、シルト層が厚い。
1915.3 地下水位は、開拓地の北側で最も高い。
1915.4 地下水位は、開拓地の北側で最も高い。
1915.5 地下水位は、開拓地の北側で最も高い。
1915.6 地下水位は、開拓地の北側で最も高い。
1915.7 地下水位は、開拓地の北側で最も高い。
1915.8 地下水位は、開拓地の北側で最も高い。
1915.9 地下水位は、開拓地の北側で最も高い。
1915.10 地下水位は、開拓地の北側で最も高い。
1915.11 地下水位は、開拓地の北側で最も高い。

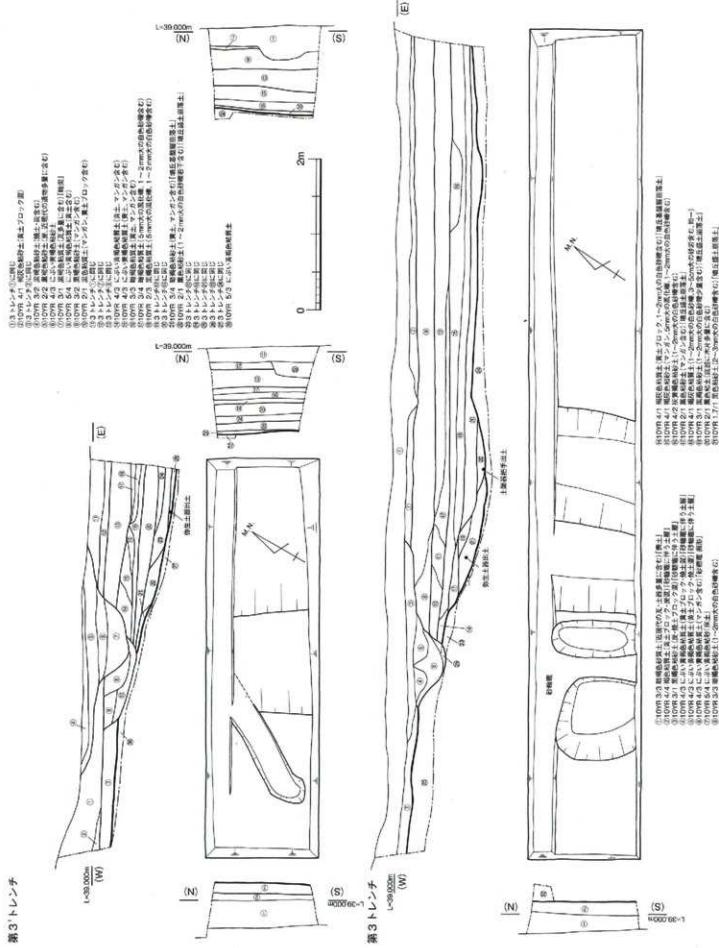
第3トレンチ

1915.12 地下水位は、開拓地の北側で最も高い。
1915.13 地下水位は、開拓地の北側で最も高い。
1915.14 地下水位は、開拓地の北側で最も高い。
1915.15 地下水位は、開拓地の北側で最も高い。
1915.16 地下水位は、開拓地の北側で最も高い。
1915.17 地下水位は、開拓地の北側で最も高い。
1915.18 地下水位は、開拓地の北側で最も高い。
1915.19 地下水位は、開拓地の北側で最も高い。
1915.20 地下水位は、開拓地の北側で最も高い。
1915.21 地下水位は、開拓地の北側で最も高い。
1915.22 地下水位は、開拓地の北側で最も高い。
1915.23 地下水位は、開拓地の北側で最も高い。
1915.24 地下水位は、開拓地の北側で最も高い。
1915.25 地下水位は、開拓地の北側で最も高い。

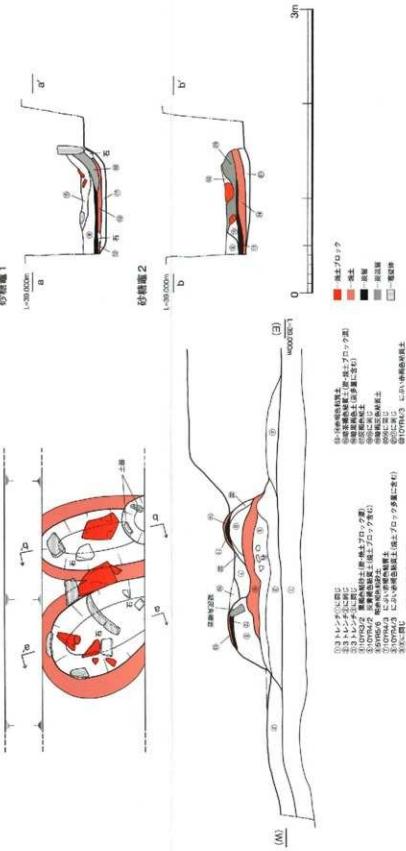
第19回 第1・4トレンチ開拓区平・断面図(1:500)



第3章 レンチ



第20図 第3・3'トレンチ調査区平・断面図(1:50)



第21図 砂糖蜜検出状況・断面図(1:40)

丘の傾斜より外側に溝状遺構が形成されている。溝の幅は2.6m、深さは0.2mを測る。埋土は、墳丘側は墳丘盛土崩落土が堆積しており(上層⑩)、東側は黒色粘土の溝堆積土(土層⑪)である。土層⑪からは、第5層と同じく底部より大量の木片が検出された。また土師器把手が出土している。

第3'トレンチ トレンチの規模は、15×5.5mを測る。第3トレンチで墳丘部分に砂地窓が構築されていたため、墳丘のオリジナルの状況を把握すべく北接に設定した。土層の堆積状況は、南側の第3トレンチとはほぼ同様である、6層に大別される。

第1層の耕作土・床上は、上層⑩・⑪が該当する。第1層上面では近・現代の土坑(土層④・⑤)、暗渠(土層⑥・⑦)を検出した。ともに土器・瓦を大量に含む。

第2層の近代以前の堆積土は、上層⑫～⑯が対応する。また墳丘側部分には土坑状の攪乱があり(土層⑧～⑩)、埋土には基盤層由来の黄土ブロックが混じる。

第3層は、第2層前段階の堆積土である。上層⑭・⑮が該当する。

第4層の墳丘崩落土は、墳丘基盤層崩落土に上層⑯が、墳丘盛土崩落土に土層⑬・⑭が対応する。土層⑬からは、弥生土器破片が出土した。

第5層周庭基盤層直上堆積土には、上層⑯が該当する。

第6層の基盤層は、⑯・⑰が該当する。基盤層は、トレンチ西端から3.2mの地点で緩やかに東へ下る。墳丘の傾斜であると推定される。

第4トレンチ トレンチの規模は、1.5×6.5mを測る。土層は、6層に大別される。

第1層は、表土である。上層①が該当する。黒色粘質土で炭、近・現代の土器・瓦を含む。

第2層は、耕作土・床上で、上層⑧～⑯が該当する。水平に堆積している。

第3層は、トレンチ南端墳丘基盤層上の堆積土である。土層②～⑦が対応する。現地形の墳丘円周に沿る上手部分に位置しており、第2層の耕作土・床土整地段階の土手構築土と推定される。下層の④・⑥は基盤層由来の土層であり、墳丘基盤層を掘削して整地した可能性が高い。

第4層は、基盤層直上堆積土である。上層⑯が該当する。黒色粘土で墳丘側からトレンチ北端にかけて水平に堆積する。

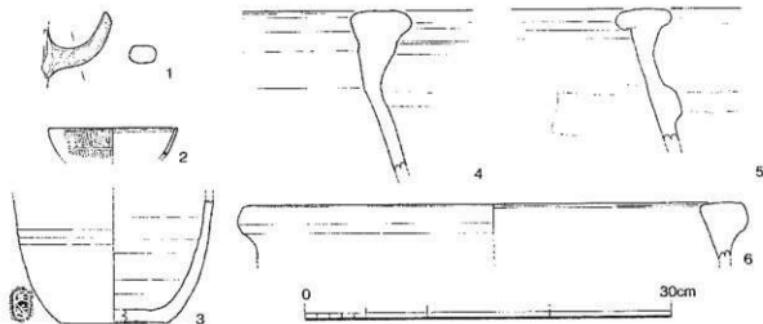
第5層は、墳丘剥離状遺構埋土である。土層⑯が該当する。溝の幅は1.8m、深さは0.12mを測る。埋土は黒色粘土である。

第6層は、基盤層である。土層⑯～⑰が該当する。トレンチ南墳丘側は黄褐色土(上層⑯～⑰)、墳丘側から北にかけては灰オリーブ細砂土(土層⑰)となる。基盤層はトレンチ南端から北へ1.6mの地点で北へ下方に傾斜する。

②遺物

各トレンチから少景の遺物が出土したが大部分は表土・耕作土および近・現代の土坑、溝から出土した近世以降の瓦・土器類である。これらのうち、重要なもののみを図化した。

墳丘出土遺物 (1)は第3トレンチ墳丘剥離状遺構(土層⑯)より出土した、土師器把手である。牛角状の形態をしており、最大幅は体部との接合部分で3.0cmを測る。先端部は先細りになる。断面形は角が丸みを帯びた方形を呈す。把手部のみ残存しており、体部は存在していないが大きさ・形状から判断してコップ形椀に取り付くと推定される。胎土は精緻で、色調は淡橙褐色である。類似した個体が香川県坂出市雄山5・6号墳から出土している(松本・宮崎2000)。雄山5・



第22図 第3トレンチ出土遺物実測図(1:4)

6号墳の年代は須恵器印辺編年でTK10に相当することから、今回の調査で出土した土師器把手もほぼ同年代とみて差し支えないと考えられる。

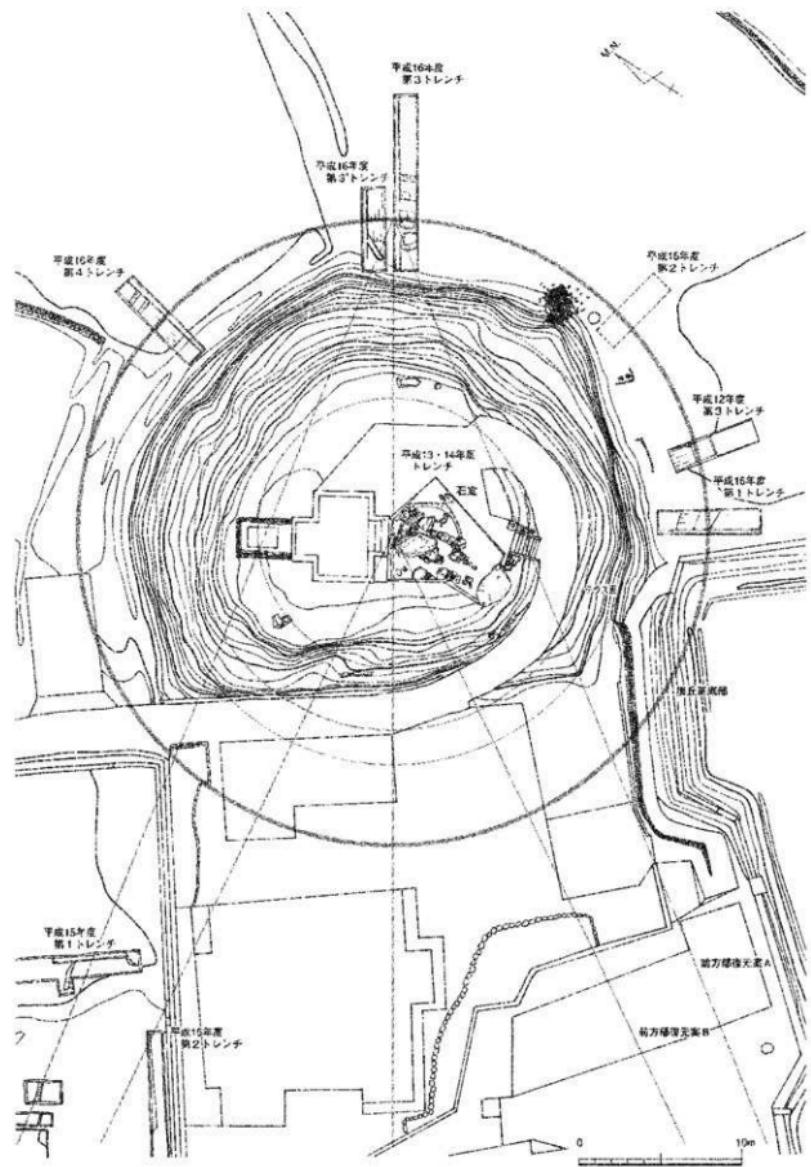
また、墳丘断溝状造構に流出した墳丘盛土崩落土(第3トレンチ上層部・第3トレンチ土層部)からは、それぞれ土器片が出土した。土師質で灰褐色を呈し、砂粒を多く含み胎土が粗いことから、弥生上器であると考えられる。器壁は著しく摩滅しており細片であることから、二次的な埋没に伴うものと推測される。

砂糖窓出土遺物 遺物の取り上げは上層の段階で遺構が2基に分かれると認識する以前に検出したものもある。(2)は、肥前磁器碗(小広束碗)である。染め付けが施されている。年代は、1770～1810年代である。(3)は、土師質鉢である。底部に「正近」の刻印が押印されている。(4)は、土師質壺である。砂糖窓1より出土した。口縁端部に肥厚し、下方にくびれがある。(5)は、土師質甕である。砂糖窓2より出土した。口縁端部は肥厚し、体部に幅2.0cmの突帯が巡る。(6)は、土師質甕である。砂糖窓2に伴うビットより出土した。直徑41.0cmを測る。口縁端部は肥厚する円化したもの他に、瓦・板石を検出した。板石は匣土中に崩落していたものが大半であったが、一部奥壁・側壁に据付けた状態で検出された。菊塚古墳平成12年度調査第1トレンチ、原間遺跡でみられる砂糖窓に類似がある(笠川2001、片桐2002、角南2003)。なお、石材の材質は凝灰角礫岩で菊塚古墳玄室出土の石屋形の石材と一致する。占墳石屋形の石材を転用していた可能性も考えられる。

第6節まとめ

①各トレンチの検討

第3・3'トレンチと第4トレンチの調査によって墳丘裾に溝状造構が存在することが明らかになった。溝の規模は、幅は最大で2.2mであることから、周濠とは言い難い。またその上層には粘土層が墳丘裾からトレンチ端部にかけて水平に堆積する。同じく下層の基盤層も平坦な面を呈している。第3トレンチで確認したところ、平坦面は4.6m続く。周濠のような大きな溝状造



第23図 後円部填土復元案(1:300)

構は検出されなかった。以上の状況から、基盤層の平坦面は周底で、墳丘裾に小規模な溝状造構を認めたと解釈できる。ただし前方部墳丘南端部分は、平成15年度の調査(第9トレンチ)で幅5.5mの溝状造構を検出し、周濠であると推定している。また傾端部(平成15年度第1トレンチ)や後円部南側(平成16年度第1トレンチ)では確認できなかった。同じ墳丘のなかでも場所や地形によって墳丘裾のありかたが異なるのか、後世の削平を受け残存していない部分があるのか、さらに調査を重ねて検討する必要がある。

②後円部墳丘復元案

平成15年度の報告書において、昨年度までの調査成果をもとに墳丘・周濠・周塙の復元案を提示している。本年度の調査では、後円部墳丘裾の確定を主眼に調査を実施した。そこで、今回は後円部墳丘の復元を中心に検討を行う。

第1～4トレンチで検出した基盤層の落ちのラインを結ぶと、現在の裾部より2m前後外側のラインが墳丘基底部と考えられる。玄室奥壁中心部を基点に直径約39mの円弧を描く。これは、前年度提示していた墳丘復元案と一致する。ただし、落ちのライン自体が不明確なこともあります。基盤層直上堆積の粘土層の始まる地点を一応の目安とし、復元を試みた。

以上のように後円部墳丘裾の範囲を凡そ把握することが出来た。これまでの墳丘測量やトレンチ調査により復元した復元案とはほぼ合致する結果となっている。また今回の調査では、墳丘裾部分で溝状造構を検出しており、前方部端部の溝状造構との関係、周濠・周塙の有無など検討課題が残る。今後はくびれ部の調査も含めて、正確な墳丘復元を試みる予定である。

付章1 平成14年度出土遺物

平成14年度調査で石室内から出土した遺物のうち、整理作業が終了したものについて報告する。今回報告するのは土師器21点(高杯18点、壺2点、コップ形土製品1点)、須恵器11点(甌3点、台付甌1点、甌5点、横瓶2点)、耳鏡8点、玉類127点である。

第1節 土師器

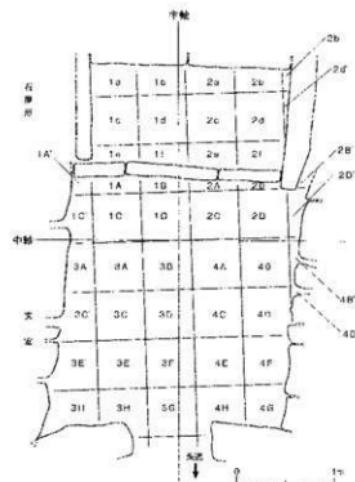
【高杯】 土師器高杯は全て玄室内から出土した。接合検討の結果、18点の高杯を確認した(第25・26回)。いずれも焼成がやや不良である上、石室床面は搅乱を受けていたため、器壁は磨滅・剥離しているものが多く調整が不明瞭な部分も多い。色調に若干の差異はあるが、胎土に含まれる砂粒などは同じであり、現時点では同一地域で生産されたと考える。

杯部・脚部の調整方法は、いずれの個体も幅0.4~0.8cm、長さ1.4~2.6cmの板ナデ調整を内外面ともに施す。杯部外表面は基本的に横方向の板ナデで調整され、個体によっては縦方向の板ナデもみられ、複数の調整が認められる。杯部外表面の端部付近は、一部で横方向の板ナデを施す。杯部内面には、主に口縁部で器面に沿う横方向の板ナデと、口縁部から底部に向かう縦方向の板ナデの2種類の調整を施す。脚部は外側が板ナデで調整する。脚部内面は(14)・(16)で縦方向の板ナデを施すが、主に横方向の板ナデで調整する。調整の方向には若干の違いがみられるものの調整は杯部・脚部とともに板ナデ調整が用いられ、工具の本日の痕跡が認められる。

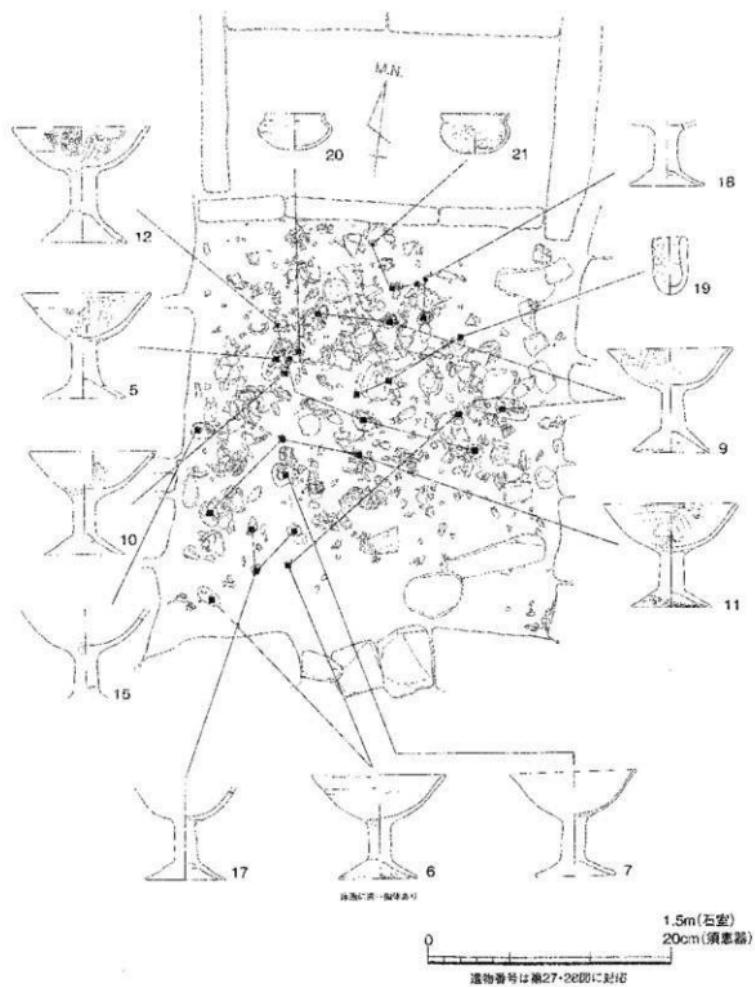
杯部と脚部の接合方法は2種類確認できる。接合方法は(11)の断面観察により、粘土を杯部と脚部の継ぎ目に補っていることがわかる。同様に(2)・(5)・(7)・(17)は、分割成形した後に接合部に粘土を充填し、不定方向の板ナデと指オサエにより接合・調整したと考える。その他の個体は杯部と脚部を別作りし、不定方向の板ナデと指オサエにより押し出して接合している。

口径は13.8~16.8cm(平均15.8cm)、器高は12.4~14.2cm(平均12.9cm)を測る。杯部の形態がおむね確認できるものが18点中14点あり、口縁部の形態から2種類(A類・B類)に分類できる。

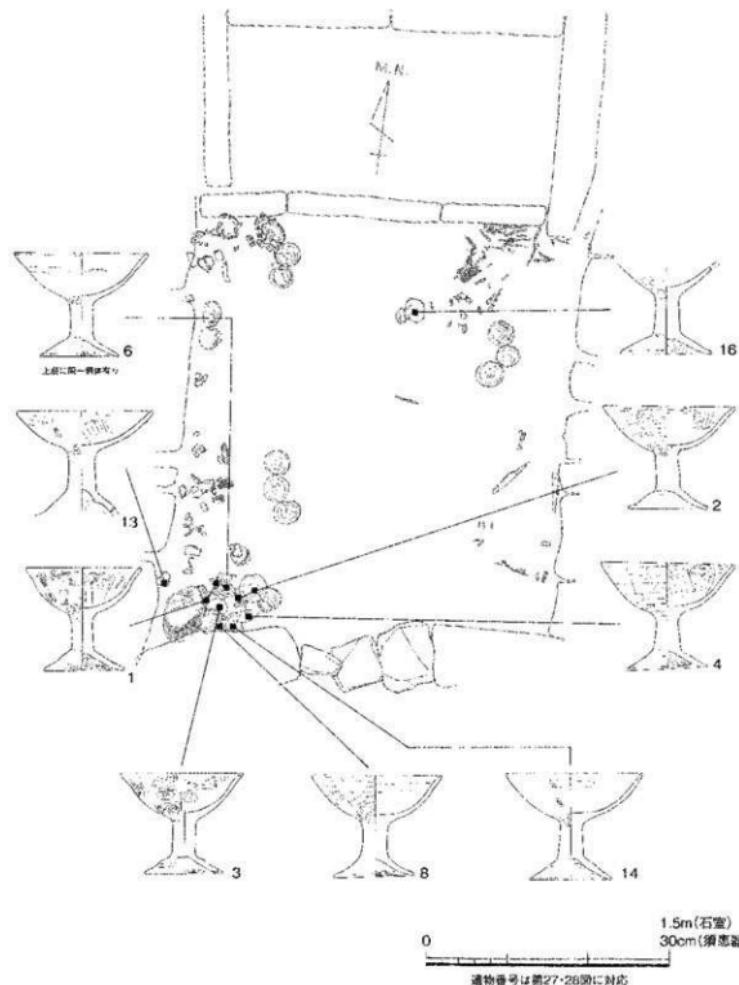
A類(1)~(7)は、口縁端部付近をやや外反させたもので、口径13.8~16.4cm(平均15.5cm)、器高12.4~12.9cm(平均12.7cm)を測る。(1)~(4)は玄室床面直上、(5)・(7)は玄室床面上層、(6)は玄室床面直上と上層で出土している。杯部の形態は、底部から内身気味に立ち上がり楕形を呈し、口縁部は端部付近でやや外反するもの



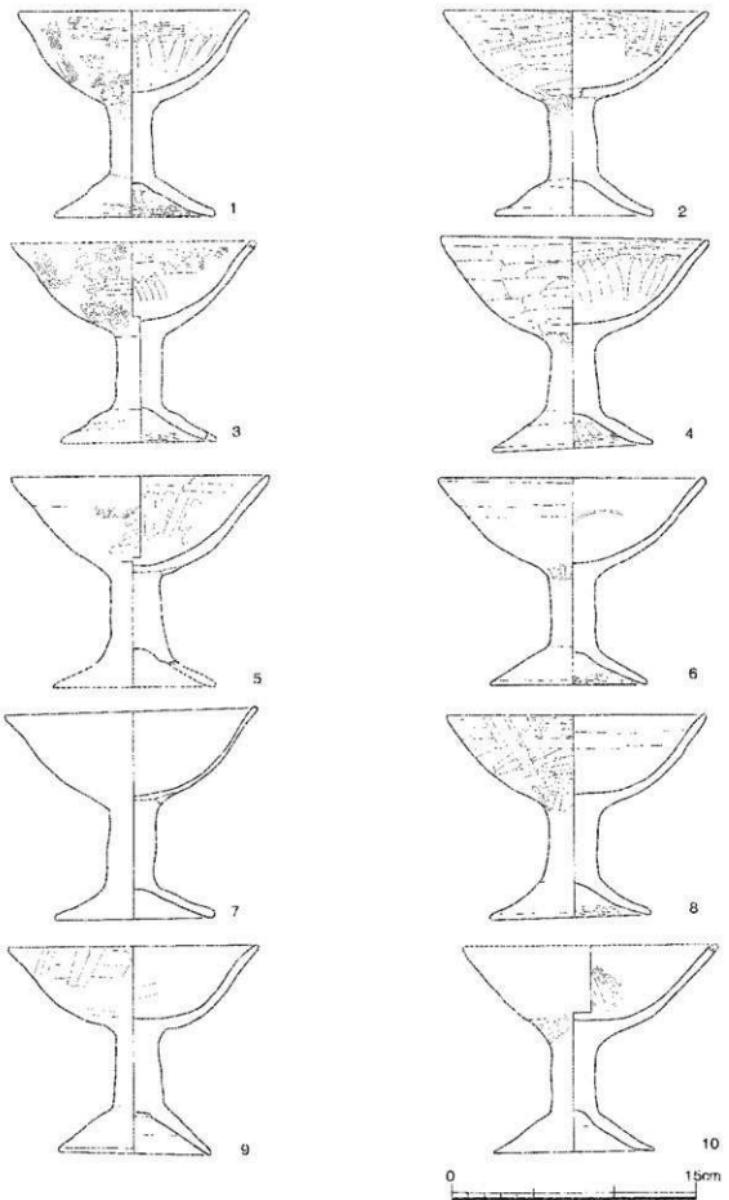
第24図 主体部遺物取り上げ地区模式図



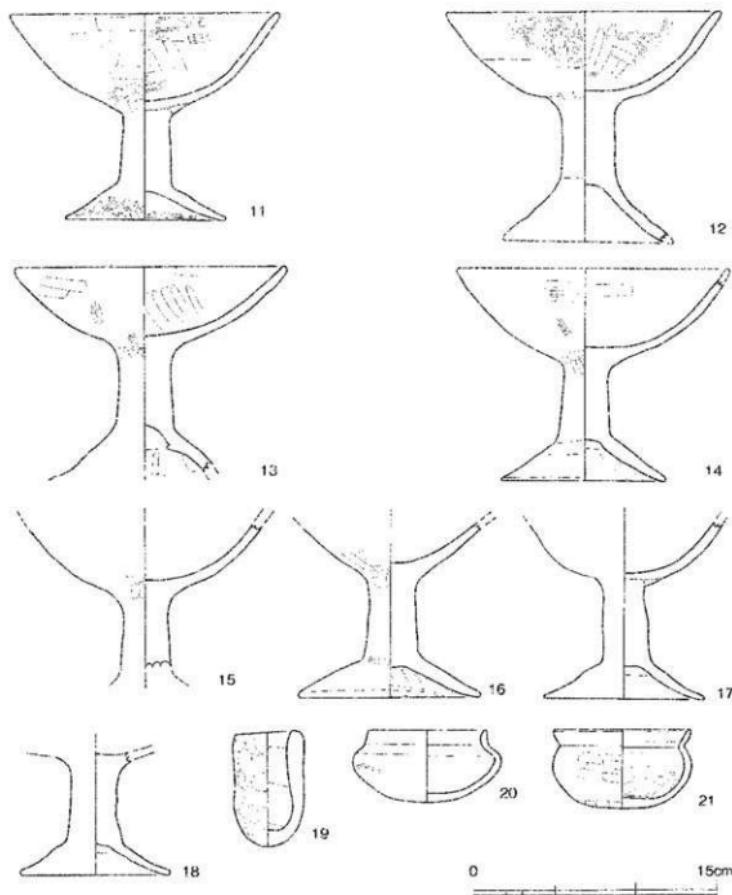
第25図 主体部土師器出土状況図①(床面上層)



第26図 主体部土師器出土状況図②(床面直上)



第27図 主体部出土土器実測図①(1 : 3)



第28図 主体部出土土器実測図②(1 : 3)

(1)と、緩やかに外側に開くもの(2)～(7)に細分できる。(2)～(7)は口縁部はやや外反し、端部は丸く取める。脚部の形態は脚柱部は直線的で短く、(1)～(3)の脚部は端部附近でやや外反し、他は直線的に外方に開く。脚縫部は口縁端部と同様に丸く取める。(1)～(3)・(6)は、外面が不定方向の板ナデ調整を行っているが、(4)は横方向の板ナデ調整である。(5)の坏部外面には板ナデの調整とは異なり、粘土を意図的に継ぎ足したような痕跡がみられる。(7)は磨滅・剥離のため器壁が薄い。脚端部は丸みがとれ、端面ができる。

B類(8)～(14)は、口縁縫部付近が直線的に立ち上がるもので、口径15.2～16.8cm(平均16.0cm)、

第1表 出土土器類觀察表①

番号	出土原壁	種類	測量(高さ・底径・直径・色彩・特徴)	目録の記述と現存の状態		
				管 類	備 考	
1	玄蕃泥瓦 裏土	陶器	口径13.8cm、底径12.8cm、高さ10.5cm 底上：小口幅・底径1~3mmの内側壁・外壁・ 底面を含む。底盤・底盤上部・外壁・内側壁の内 側壁は漆付(白色)・底盤・底盤上部は白漆付(白) 質感20%	管類は底から上部まで、さらには20cm以内 する。縫合部は「V」型のV字状を有する。 外壁充実の所(内側壁)は、表面が若干に凹凸感 及び凹凸感。丁度底と底盤部分の隙間に隙間 や、不規則感は全く切跡の気味アリ。底盤部分 は底半分の板で、縫合部は斜めで接続。	内・外壁に少しある 外観看者。内部は10cm と縫合部を除む。底 盤のみならぬ。	765・767・ 3300
2	玄蕃泥瓦 裏土	陶器	口径19.8cm、底径17.8cm、高さ10.5cm 底上：小口幅・底径1~3mmの内側壁・外壁・ 底盤を含む。底盤・底盤上部・外壁・内側壁の内 側壁は漆付(白色)・底盤・底盤上部は白漆付(白) 質感20%	底盤から上部まで緩やかな曲面で上方に向 かう。底盤部はやや厚めである。其の内側は充 実の胸突。底盤上部の内側壁は「V」字形の縫合 部がある。底盤部は厚めのため、内側壁は少しある。外壁 は底盤部より薄い。底盤の底は鉛筆で、外壁と相 当の板厚で不規則の板張り。	内・外壁に少しある 外観看者。内部は10cm と縫合部を除む。底 盤のみならぬ。	772・773・ 3306
3	玄蕃泥瓦 裏土	陶器	口径13.2cm、底径12.8cm、高さ10.5cm 底上：小口幅・底径1~3mmの内側壁・外壁・ 底盤を含む。底盤・底盤上部・外壁・内側壁の内 側壁は漆付(白色)・底盤・底盤上部は白漆付(白) 質感20%	底盤から上部まで緩やかな曲面で上方に向 かう。底盤部はやや厚めである。其の内側は充 実の胸突。底盤上部の内側壁は「V」字形の縫合 部がある。底盤部は厚めのため、内側壁は少しある。外壁 は底盤部より薄い。底盤の底は鉛筆で、外壁と相 当の板厚で不規則の板張り。	内・外壁に少しある 外観看者。内部は10cm と縫合部を除む。底 盤のみならぬ。	768
4	玄蕃泥瓦 裏土	陶器	口径13.2cm、底径12.8cm、高さ10.5cm 底上：小口幅・底径1~3mmの内側壁・外壁・ 底盤を含む。底盤・底盤上部・外壁・内側壁の内 側壁は漆付(白色)・底盤・底盤上部は白漆付(白) 質感20%	底盤から上部まで緩やかな曲面で上方に向 かう。底盤部はやや厚めである。其の内側は充 実の胸突。底盤上部の内側壁は「V」字形の縫合 部がある。底盤部は厚めのため、内側壁は少しある。外 壁は底盤部より薄い。底盤の底は鉛筆で、外壁と相 当の板厚で不規則の板張り。	内・外壁に少しある 外観看者。内部は10cm と縫合部を除む。底 盤のみならぬ。	778・3661
5	玄蕃泥瓦 裏土	陶器	口径16.8cm、底径15.8cm、高さ10.5cm 底上：小口幅・底径1~3mmの内側壁・外壁・ 底盤を含む。底盤・底盤上部・外壁・内側壁の内 側壁は漆付(白色)・底盤・底盤上部は白漆付(白) 質感20%	底盤から上部まで緩やかな曲面で上方に向 かう。底盤部はやや厚めである。其の内側は充 実の胸突。底盤上部の内側壁は「V」字形の縫合 部がある。底盤部は厚めのため、内側壁は少しある。外 壁は底盤部より薄い。底盤の底は鉛筆で、外壁と相 当の板厚で不規則の板張り。	内・外壁に少しある 外観看者。内部は10cm と縫合部を除む。底 盤のみならぬ。	598・362
6	玄蕃泥瓦 裏土	陶器	口径16.8cm、底径15.8cm、高さ10.5cm 底上：小口幅・底径1~3mmの内側壁・外壁・ 底盤を含む。底盤・底盤上部・外壁・内側壁の内 側壁は漆付(白色)・底盤・底盤上部は白漆付(白) 質感20%	底盤から上部まで緩やかな曲面で上方に向 かう。底盤部はやや厚めである。其の内側は充 実の胸突。底盤上部の内側壁は「V」字形の縫合 部がある。底盤部は厚めのため、内側壁は少しある。外 壁は底盤部より薄い。底盤の底は鉛筆で、外壁と相 当の板厚で不規則の板張り。	内・外壁に少しある 外観看者。内部は10cm と縫合部を除む。底 盤のみならぬ。	51・70・ 657・723・ 3024・ 3056・ 3067
7	玄蕃泥瓦 裏土	陶器	口径15.8cm、底径15.8cm、高さ10.5cm 底上：小口幅・底径1~3mmの内側壁・外壁・ 底盤を含む。底盤・底盤上部・外壁・内側壁の内 側壁は漆付(白色)・底盤・底盤上部は白漆付(白) 質感20%	底盤から上部まで緩やかな曲面で上方に向 かう。底盤部はやや厚めである。其の内側は充 実の胸突。底盤上部の内側壁は「V」字形の縫合 部がある。底盤部は厚めのため、内側壁は少しある。外 壁は底盤部より薄い。底盤の底は鉛筆で、外壁と相 当の板厚で不規則の板張り。	内・外壁に少しある 外観看者。内部は10cm と縫合部を除む。底 盤のみならぬ。	54・55・ 334
8	玄蕃泥瓦 裏土	陶器	口径15.8cm、底径15.8cm、高さ10.5cm 底上：小口幅・底径1~3mmの内側壁・外壁・ 底盤を含む。底盤・底盤上部・外壁・内側壁の内 側壁は漆付(白色)・底盤・底盤上部は白漆付(白) 質感20%	底盤から上部まで緩やかな曲面で上方に向 かう。底盤部はやや厚めである。其の内側は充 実の胸突。底盤上部の内側壁は「V」字形の縫合 部がある。底盤部は厚めのため、内側壁は少しある。外 壁は底盤部より薄い。底盤の底は鉛筆で、外壁と相 当の板厚で不規則の板張り。	内・外壁に少しある 外観看者。内部は10cm と縫合部を除む。底 盤のみならぬ。	294・765
9	玄蕃泥瓦 裏土	陶器	口径15.8cm、底径15.8cm、高さ10.5cm 底上：小口幅・底径1~3mmの内側壁・外壁・ 底盤を含む。底盤・底盤上部・外壁・内側壁の内 側壁は漆付(白色)・底盤・底盤上部は白漆付(白) 質感20%	底盤から上部まで緩やかな曲面で上方に向 かう。底盤部はやや厚めである。其の内側は充 実の胸突。底盤上部の内側壁は「V」字形の縫合 部がある。底盤部は厚めのため、内側壁は少しある。外 壁は底盤部より薄い。底盤の底は鉛筆で、外壁と相 当の板厚で不規則の板張り。	内・外壁に少しある 外観看者。内部は10cm と縫合部を除む。底 盤のみならぬ。	7・23・ 31・35・ 365・392
10	玄蕃泥瓦 裏土	陶器	口径16.8cm、底径15.8cm、高さ10.5cm 底上：小口幅・底径1~3mmの内側壁・外壁・ 底盤を含む。底盤・底盤上部・外壁・内側壁の内 側壁は漆付(白色)・底盤・底盤上部は白漆付(白) 質感20%	底盤から上部まで緩やかな曲面で上方に向 かう。底盤部はやや厚めである。其の内側は充 実の胸突。底盤上部の内側壁は「V」字形の縫合 部がある。底盤部は厚めのため、内側壁は少しある。外 壁は底盤部より薄い。底盤の底は鉛筆で、外壁と相 当の板厚で不規則の板張り。	内・外壁に少しある 外観看者。内部は10cm と縫合部を除む。底 盤のみならぬ。	239・244・ 399

第2表 出土土師器観察表②

器種	器形	器高(cm)	底面	内面	外觀	参考文献
12 素面灰 土器	灰不 同底腹内 部直筒 形脚窓 底	口径16.5cm 底径15.5cm 高さ10.5cm (14.2)cm 厚さ1.5mm 内底に凹 凸、刃部を多く含む/底面：長方形/底 部：円筒形/内 部直筒形/脚 窓：横切面60%	外縁から口縁部にかけて底を少し立ち上 げ、外縁ともに内底 に凹凸があり、刃部は多く含む。底部内 部の刃部の波打つ形 が見られる。	外縁ともに内底 に凹凸があり、刃部は多く含 む。底部内 部の刃部の波打つ形 が見られる。	(9) 68- 683, 345	
13 素面灰 土器	灰本 直底	口径18cm 底径16.5cm 高さ10.5cm 内底に凹 凸、刃部を多く含む/底面：長方形/底 部：円筒形/内 部直筒形/脚 窓：横切面60%	外縁は外方に凸に湾く、底部はやや立ち上 げ、底面は外方に凸に湾く、刃部は多く含 む。底部内 部の刃部の波打つ形 が見られる。	外縁は外方に凸に湾く、刃部は多く含 む。底部内 部の刃部の波打つ形 が見られる。	254	
15 素面灰 土器	灰本 輪脚	口径16.5cm 底径15.5cm 高さ10.5cm 内底に凹 凸、刃部を多く含む/底面：長方形/底 部：円筒形/内 部直筒形/脚 窓：横切面60%	外縁は外方に凸に湾く、刃部は多く含 む。底部内 部の刃部の波打つ形 が見られる。	外縁は外方に凸に湾く、刃部は多く含 む。底部内 部の刃部の波打つ形 が見られる。	291-293, 296- 296	
16 素面灰 土器	灰本 脚窓	口径16.5cm 底径15.5cm 高さ10.5cm 内底に凹 凸、刃部を多く含む/底面：長方形/底 部：円筒形/内 部直筒形/脚 窓：横切面60%	外縁は外方に凸に湾く、刃部は多く含 む。底部内 部の刃部の波打つ形 が見られる。	外縁は外方に凸に湾く、刃部は多く含 む。底部内 部の刃部の波打つ形 が見られる。	462	
17 素面灰 土器	灰本 脚窓	口径16.5cm 底径15.5cm 高さ10.5cm 内底に凹 凸、刃部を多く含む/底面：長方形/底 部：円筒形/内 部直筒形/脚 窓：横切面60%	外縁は外方に凸に湾く、刃部は多く含 む。底部内 部の刃部の波打つ形 が見られる。	外縁は外方に凸に湾く、刃部は多く含 む。底部内 部の刃部の波打つ形 が見られる。	461	
18 素面灰 土器	灰本 脚窓	口径16.5cm 底径15.5cm 高さ10.5cm 内底に凹 凸、刃部を多く含む/底面：長方形/底 部：円筒形/内 部直筒形/脚 窓：横切面60%	外縁は外方に凸に湾く、刃部は多く含 む。底部内 部の刃部の波打つ形 が見られる。	外縁は外方に凸に湾く、刃部は多く含 む。底部内 部の刃部の波打つ形 が見られる。	73-78, 80	
19 素面灰 土器	灰本 脚窓 上脚	口径16.5cm 底径15.5cm 高さ10.5cm 内底に凹 凸、刃部を多く含む/底面：長方形/底 部：円筒形/内 部直筒形/脚 窓：横切面60%	外縁は外方に凸に湾く、刃部は多く含 む。底部内 部の刃部の波打つ形 が見られる。	外縁は外方に凸に湾く、刃部は多く含 む。底部内 部の刃部の波打つ形 が見られる。	21-399, 3060	
20 素面灰 土器	灰 直底	口径16.5cm 底径15.5cm 高さ10.5cm 内底に凹 凸、刃部を多く含む/底面：長方形/底 部：円筒形/内 部直筒形/脚 窓：横切面60%	外縁は外方に凸に湾く、刃部は多く含 む。底部内 部の刃部の波打つ形 が見られる。	外縁は外方に凸に湾く、刃部は多く含 む。底部内 部の刃部の波打つ形 が見られる。	21-192, 3035, 3036 3081	
21 素面灰 土器	灰	口径16.5cm 底径15.5cm 高さ10.5cm 内底に凹 凸、刃部を多く含む/底面：長方形/底 部：円筒形/内 部直筒形/脚 窓：横切面60%	外縁は外方に凸に湾く、刃部は多く含 む。底部内 部の刃部の波打つ形 が見られる。	外縁は外方に凸に湾く、刃部は多く含 む。底部内 部の刃部の波打つ形 が見られる。	31-36, 372-621, 3001, 3077, 3090	

器高12.5~14.2cm(平均13.0cm)を測る。(8)・(13)・(14)は玄室床面直上、(9)~(12)は玄室床面
上層で出土している。坏底部に面を有し、坏部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く收める。(8)・(9)は口縁端部に内傾する面がみられる。脚柱部は直線的で短く、脚襟部
はやや反るもの(8)、直線的なもの(9)・(10)・(14)、小さな段を有するもの(11)・(12)・(13)に
細分できる。脚襟部はいずれも丸く收める。B類はいずれも脚部は内面の絞りが強く、脚襟部か
ら脚柱部までが高いものが7点中5点を占める。(13)はこの中では坏部の開き方が大きく、高さ
が低い。脚部内面には強い絞りの痕跡とともに脚柱部と裾部の間に小さな隙間がみられる。

接合検討を重ねたにも関わらず、坏部の形態が確認できない高坏が複数個体あり、このうち
(15)~(18)の4点を図化した。この4点は磨滅・剥離のため、調整が不明な部分が多い。(16)は

玄室床面上の中央付近で出土し、原位置を保っていた可能性がある。(15)・(17)・(18)は玄室床面上層で出土している。(16)～(18)は坏底部から脚端部まで残存し、(17)は坏部と脚柱部まで残存する。(15)・(17)は坏部が中位まで残存し、坏部は急な角度で立ち上がる。脚柱部は直線的で浅い段を設け、直線的な(16)とやや外反する(17)・(18)に細分できる。(15)・(16)は坏部と脚部の接合の調整痕がみられる。脚部は全て中実であり、脚部内面にみられる絞りの痕跡に強弱があるが、その違いは坏部の形態との対応がみられない。(13)の内面のわずかな隙間がみられる点や(16)の脚基部に一部板ナデの痕、(4)でみられるような外側の指オサエの痕跡などから、脚部は脚柱部と脚断部を別作りで接合し、調整した可能性がある。

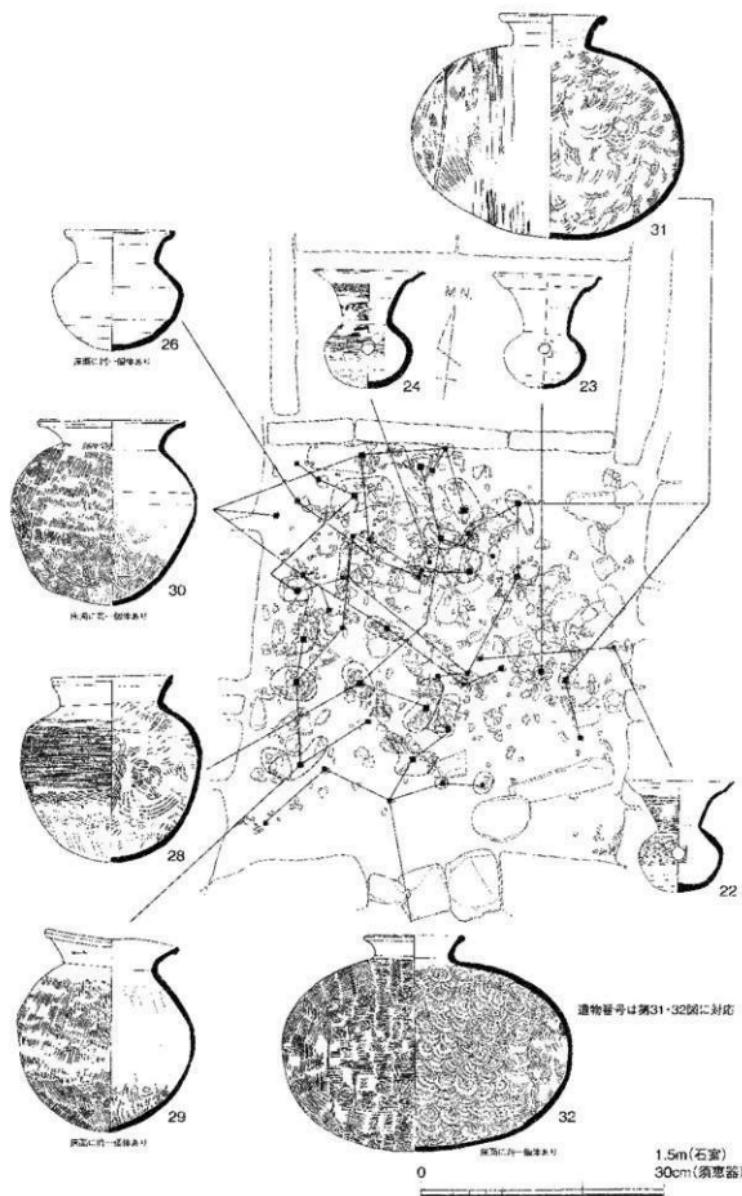
【コップ形土製品】 床面上層から1点(19)出土している(第28図)。一見するとコップ形のイイダコ壺のように見えるが、イイダコ壺に特徴的な糸孔がみられないことからイイダコ壺ではないと判断した。内面と口縁部の一部には朱の付着が認められ、祭祀用上器の可能性が想定できる。外側調整は指オサエ、内面調整は指ナデであるが口縁部には指オサエ痕が残る。外側には罐長の黒斑がみられる。器壁は底部が厚く体部はやや薄くなるものの、口縁部に近づくにつれて再び厚くなり、口縁端部はやや薄くなる。そのため口縁部内面は聞き気味になる。口縁端部は平坦で底部の形態は丸みを帯びる。

【壙】 玄室内より2点(20)・(21)出土している(第28図)。ともに床面上層から出土している。底部は体部にかけて緩やかに立ち上がり、体部中ほどよりやや上で屈曲し肩を成形したあと、やや内傾しながら立ち上がり、口縁部を成形している。体部は(19)よりも扁平な形を呈す。頸・口縁部外側には横方向のナデ、体部には板ナデ状の調整を施す。内面体・底部はナデ調整である。内部からは計35点の主張丸玉が出土した。副葬品として納入されていたと考える。(21)の底部から体部にかけてやや強く立ち上がり、体部最大径を中心や上に作り、緩やかに屈曲し肩を成形する。頭部は強く屈曲し、口縁部は外反する。口縁部・頸部内外面には横方向のナデ、体部内外面には横方向の板ナデ、底部内外面には不定方向の板ナデがそれぞれ施されている。

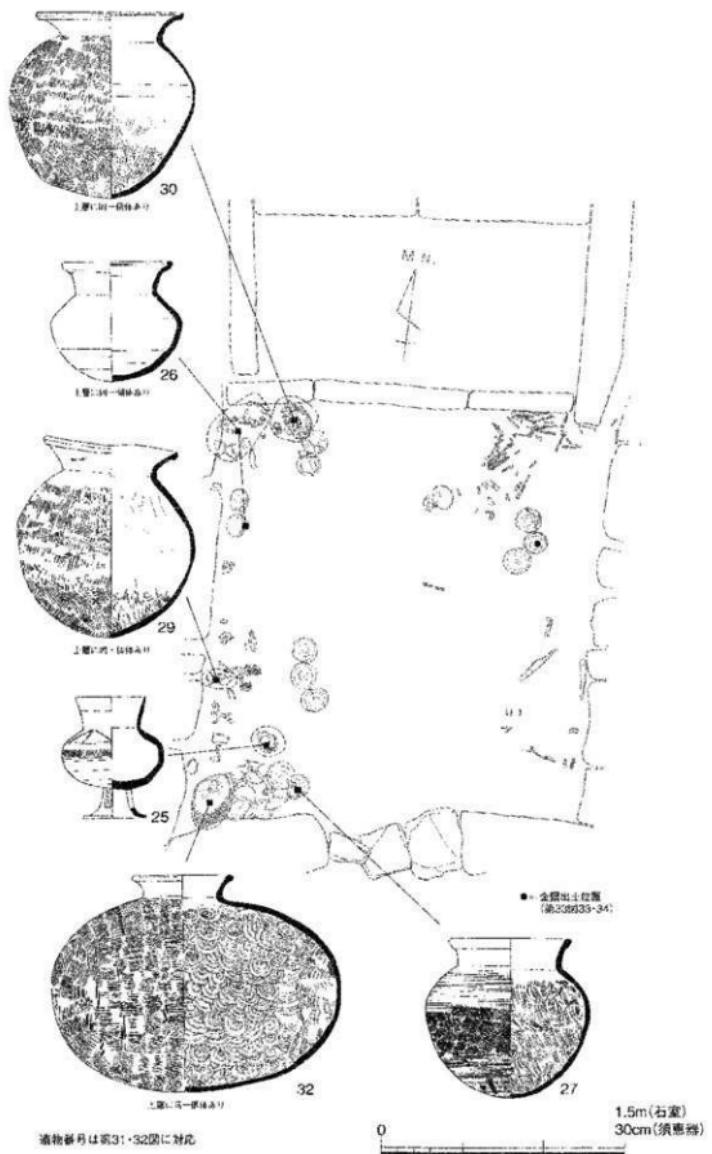
第2節 須恵器

須恵器は玄室床面上層では大半が破片で出土し、床面上では完形に近い坏身・坏蓋、右袖付近と石屋形付近で壺や横瓶の破片が出土している(第29・30図)。なお、須恵器の内、坏身・坏蓋、高杯については、平成14年度報告書にて掲載しているのでご参照願いたい。

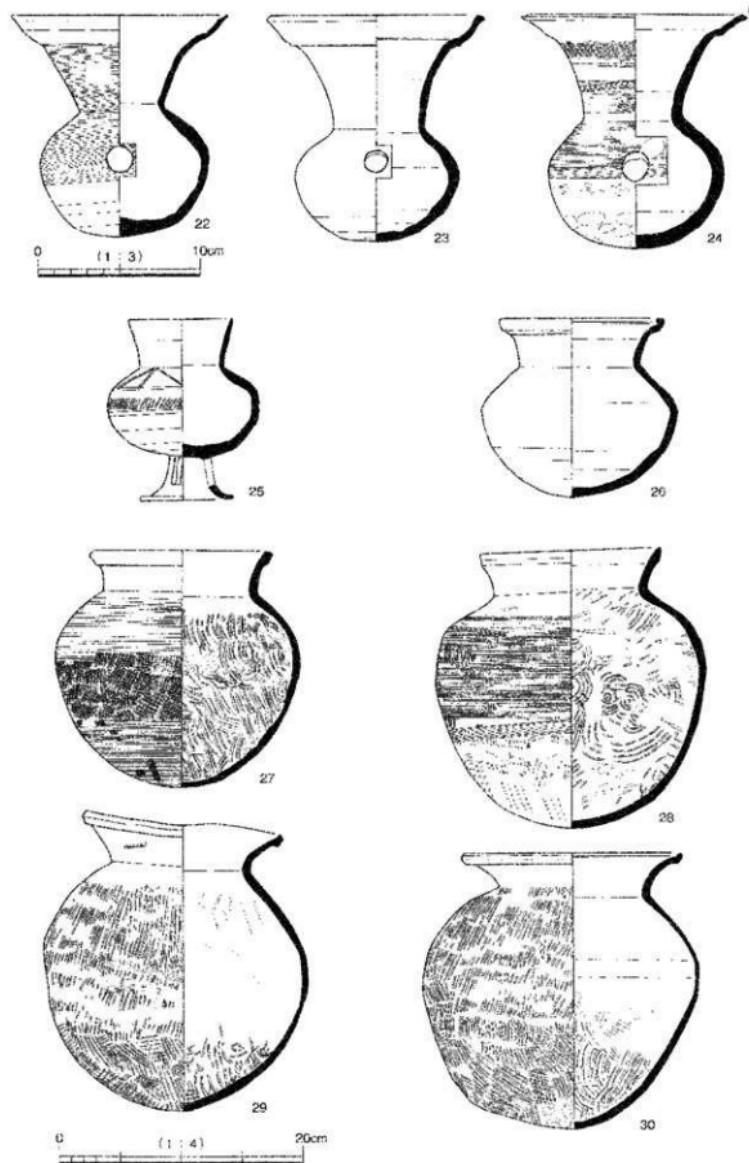
【壙】 壇は接合により3点(22)～(24)確認でき、全て床面上層から破片で出土している。残存率の低い(22)は体部円孔を確認できなかったが、出土した2点と口縁部・頸部・体部の一部の破片から壇と判断した。器形は頸部がラッパ状に外反し、口径が体部直径を上回る。(22)・(23)の口縁部は内側にやや屈曲するが、(24)は口縁部が外傾する。3点とも口縁端部をつまみ出して成形している。頸部上位では(23)・(24)は外側に鋭い棱を有し、(22)は鈍い段が1条みられる。(23)のみ内面に1条の浅い沈線が巡る。3点とも肩部の張りは弱く、体部は球形を成す。調整は口縁部から体部は回転ナデ調整、底部は回転ヘラケズリを行い、(22)と(24)の底部は回転ヘラケズリ後、ナデ消しを行い、底部に丸みを帯びる。底部および体部の円孔付近に指オサエの痕跡が残存する。頸部・体部の内面は回転ナデで調整し、(22)・(24)は調整が粗雑なためか頸部および底部内面には、粘土練の巻き上げ痕が残る。(22)は頸部から体部にかけて1cmあたり8～11本のカキ



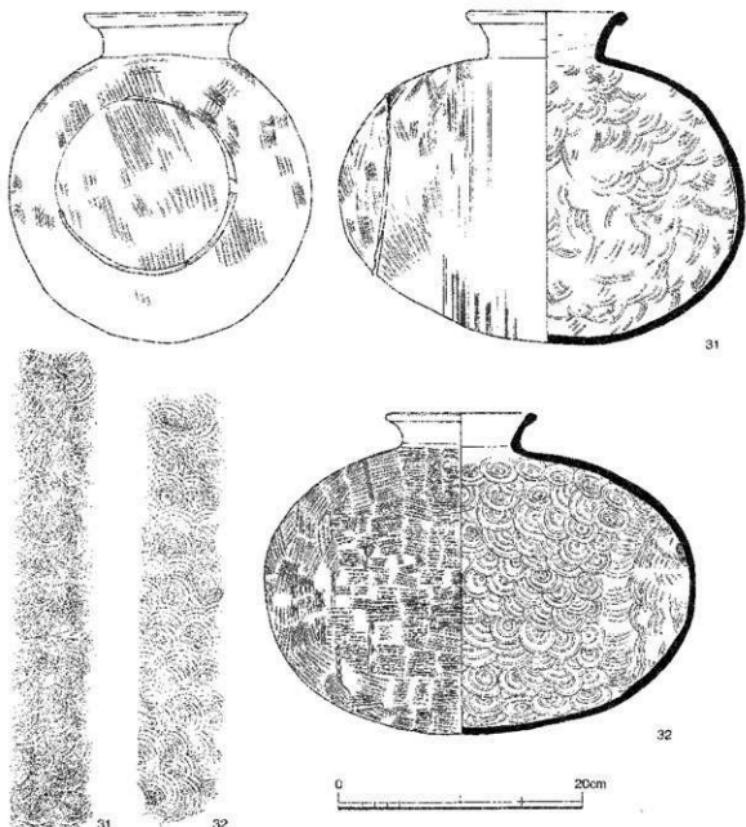
第29図 主体部須恵器出土状況図①(床面上層)



第30図 主体部須恵器出土状況図②(床面直上)



第31図 主体部出土須恵器実測図①(縮1:3、査・堀1:4)



第32図 主体部出土須惠器実測図②(1:4)

メを施し、(24)は頸部上位に櫛描波状文が巡り、頸部から体部にかけて1cmあたり8~10本のカキメを施す。また、(24)は頸基部付近に接合痕がみられる。

頸部の形態、調整、また体部に文様が施されず頸部上位に波状文の文様帯のみが巡る特徴などを踏まえると、田辺靄年のTK10型式併行期に該当する。その中でも頸部の長頸化がみられず、体部に文様が確認できないことから、口縁部の形態と器形の特徴から類似する(22)・(24)はTK10型式併行期の中でも型式的に新段階の様相を呈する。

【臺】 壺は台付壺が1点(25)出土した。(25)は、女空床面直上の右袖付近からはば完形の状態で出土した。体部中央付近には2本の円線が巡り、その間に櫛描列点文を施す。口縁部から体部中位にかけて回転ナデ、底部は回転ヘラケズリで調整される。肩部から体部上位にかけて鳥の足のように3方向に3本の線からなるヘラ記号がみられる。脚部は安定性を欠き、方形の透かしが

第3表 出土須烹器鉢底表

3方向穿たれ、内面の痕跡から外側から内側に穿孔されたことが確認できる。

【甕】 瓢(26)～(30)は5点出土した。(27)は玄室床面直上、(28)は玄室床面上層、(29)・(30)は玄室床面上層および直上から4点とも複数の破片で出土した。(26)は玄室床面直上の右脇部付近で出土した。焼成が不良で軟質である。口縁端面に浅い凹線が巡る。口縁部から体部中位にかけて回転ナデにより成形され、中位はさらに回転ヘラケズリにより面を作っている。下位は回転ヘラケズリが行われ、体部内面全体にナデ調整が行われる。甕の口径の平均は15.3cm、頸基部の平均は11.9cm、体部最大径の平均は20.6cmを測り、いずれも精緻な成形、調整である。(27)～(30)は口縁部は末として(27)・(29)が外側に肥厚し面を有し、(28)・(30)は丸く取める。頸部は直線的な(27)・(28)と外反する(29)・(30)がみられる。体部最大径は主に中位に位置し、(28)のみ肩が張り上位になり、底部は全ての個体で丸みを帯びる。4点ともタタキにより整形され、(27)は格子タタキ、他3点は平行タタキで整形されている。(28)・(30)は底部のタタキの痕跡が一部ナデ消されている。タタキ原体の形状は全体的に方形であるが、(28)はナデ消されているため正方形に近い形がよくみられる。(27)～(29)はタタキの後にカキメを施し、(29)が不定方向、他2点は口縁部とほぼ平行にカキメが巡る。当具の形状は主に同心円状であり、(27)～(30)4点とも複数回当てられているため重複関係を判断することは難しい。また(29)・(30)の内面の当具痕は、上位から中位にかけてナデ消される。(28)の体部中位にはカキメの上に壺を持ち上げる際に付いたと思われる指紋が複数みられる。(29)は頭部の一部で工具の痕跡がみられ、カキメを施す際に付いたものと考えられる。色調が異なるものの形態や調整技法から(29)・(30)は同時期のものと考えられる。

【横瓶】 横瓶は2点(31)・(32)出土している。2点とも体部は長円球の倒卵形を呈し、器高27cm前後、体部最大径35cm前後と大きさがほぼ類似する。外面には平行タタキで整形後にカキメを施し、内面には同心円当具痕が残る。2点とも玄室床面上層・直上で破片の状態で出土し、(31)は玄室床面上層で出土し、(32)は体部の大半が玄室床面直上の右脇付近で出土している。(31)は口縁部が肥厚して端部は丸く取める。外面には焼台が融着しており、内面には閉塞円盤の痕が残る。外面は平行タタキの痕跡がみられないことから、ナデ消したと想定する。内面には閉塞円盤がみられ、同心円当具痕はその部分にはみられない。また、頸部付近にオリーブ灰色の自然釉が付着している。(32)の口縁部は丸く取め、端部に面を有する。体部全体に平行タタキが施されているが、一部ナデ消された痕跡や小口付近で格子状タタキがみられる。内面全体に明瞭に同心円当具痕が確認できるが、一部凹んでいる箇所があり、閉塞した部分が確認できる。体部のカキメが施されている部分は、外面に接合した調整が確認できることから別作りと考えられる。

第3節 耳 鑼

石室内から8点の耳鑃(金環6点・銀鑃2点)が出土している(第34図-33～40)。材質・形状および出土状況から4対になると思われる。

【金鑃】 石室内より計6点出土した。(33)・(34)、(35)・(36)、(37)・(38)が対になると思われる。(33)・(34)は、石室内より出土した。この内、(33)は玄室内4B区床面直上にある須恵器壙内より出土した。また(34)はこの須恵器の直下から出土しており、出土位置および直徑や形状から対になるのは明白である(第30図●部分の壙内部および甬下より出土)。いずれも原位置を保って

いると考える。(33)は銅芯全張りで縦径18.60mm、横径19.05mmと僅かに楕円形である。断面はやや歪な円形で、開き部付近では多角形状を呈する。端面(接面)の中央部がやや凹み、円板をはめ込み折り返して成形した可能性が高い。一部金箔が剥けている。素材の厚みは欠損部で計測すると0.2mmである。(34)は銅芯全張りで縦径18.35mm、横径19.25mmと僅かに楕円形である。断面は歪な円形で、開き部付近では隅丸方形を呈する。端面(接面)の中央部がやや凹み、円板をはめ込み折り返して成形した可能性が高い。一部金箔が剥けている。素材の厚みは欠損部で計測すると0.15mmである。(33)・(34)はともに、直徑が大きいこと、内面に縱方向の皺が観察できることなどから、金箔を貼り付けた後、重ねて成形していると推測する。

(35)・(36)は、ともに右屋形内東側の2 d 区砂利層内より出土した。いずれも原位置を保っていないと考える。出土位置および形状から対になると考える。(35)は銀芯全張りで縦径16.80mm、横径17.95mmと僅かに楕円形である。断面はほぼ円形で、開き部付近では隅丸方形を呈する。完形であるため肉眼観察では不明であるが、X線観察および(36)の断面観察により中実であることが確認できる。また端面(接面)は中央部がやや凹むが、金箔を張り合わせた痕跡や円板をはめ込みの軌跡などは観察できない。(36)は銀芯全張りで縦径15.25mmを測る。全体の約40%が欠損している。断面はほぼ円形で、開き部付近では歪な円形を呈する。断面観察により中実であることが分かる。(35)・(36)は、ともにアマルガム法を用いたと推測する。

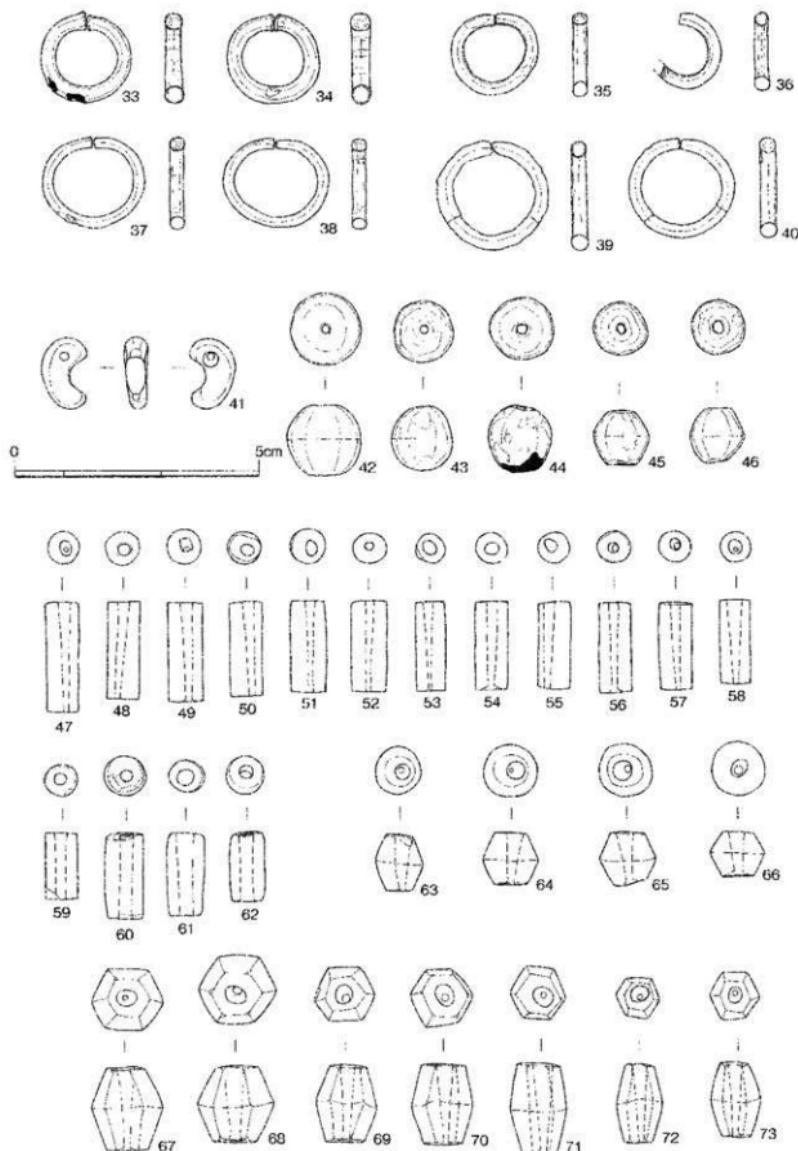
(37)は石屋形内東側2区砂利層直上から、(38)も石屋形内東側2 a・2 d 層砂利層内より出土した。いずれも原位置を保っていたとは考えにくいか、ほぼ接近した位置関係にあること、直徑や形状が対になると考える。(37)は銅芯全張りで縦径19.15mm、横径21.20mmと僅かに楕円形である。断面は歪な円形で、開き部付近では隅丸方形を呈する。また端面(接面)の中央部がやや凹み、円板をはめ込み折り返して成形した可能性が高い。(38)は銅芯全張りで縦径19.15mm、横径21.20mmと、僅かに楕円形である。断面は歪な円形で、開き部付近では隅丸方形を呈する。端面(接面)の中央部がやや凹み、(37)と同様、円板をはめ込み折り返して成形した可能性が高い。(37)・(38)は、ともにアマルガム技法を用いたと推測する。

【銀鏡】 計2点出土した。(39)は石屋形内東側2 d 区砂利層内、(40)は石屋形東側2 e 区砂利層内より出土した。いずれも原位置を保っていないと考える。出土位置や形状より対になると考える。(39)は銀製で、縦径22.35mm、横径22.40mmと、ほぼ正円である。鏡化が著しく、全体が鏽で覆われている。このため、断面形態および開き部の形状は不明瞭である。(40)は銀製で、縦径20.20mm、横径21.35mmと、僅かに楕円形である。(39)と同様、鏡化が著しく、全体が鏽で覆われていたため、断面形態および開き部の形状は不明瞭である。いずれも鏡化が著しいことから銀以外の鉱物が比較的多く含まれていると推測できる。

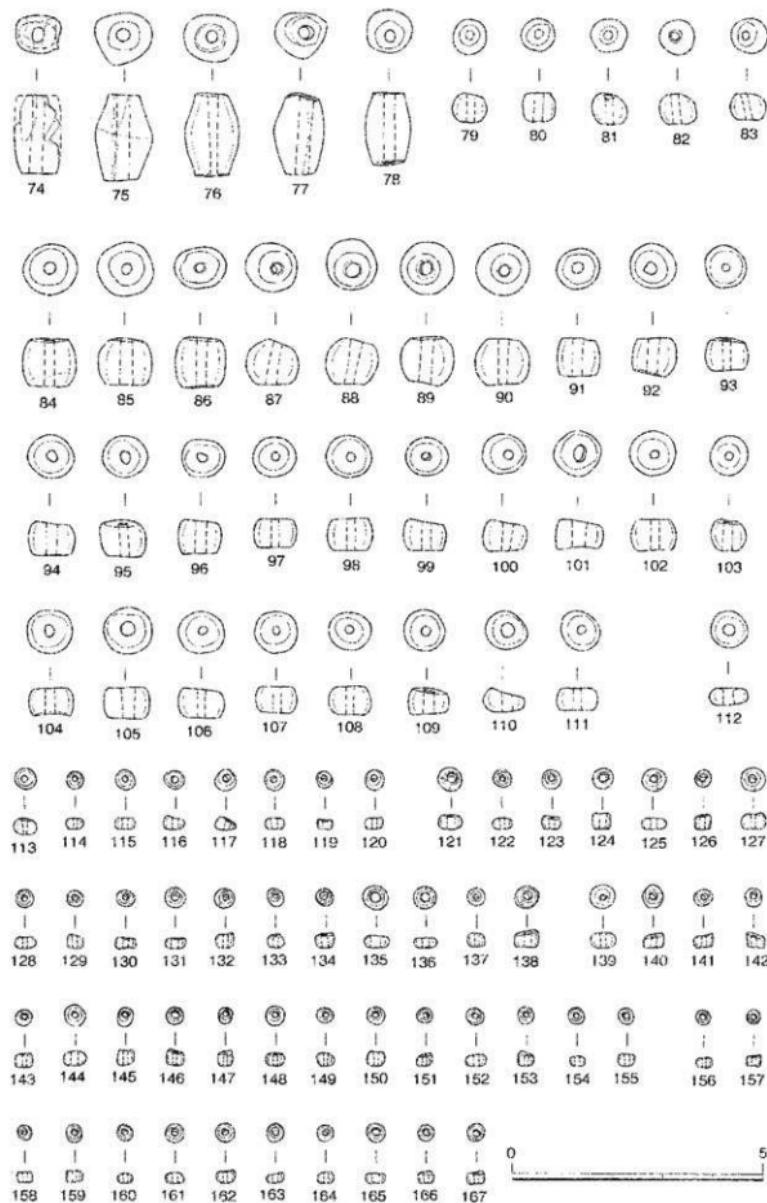
いずれの耳環も現時点での肉眼観察の結果に基づいている。詳細な製作技法、材質などの考察は、今後の科学的分析の結果を待つて再度行いたい。

第4節 玉類

玉類は玄室内および石屋形内より多数出土した。種別としては勾玉・空玉・管玉・算盤玉・切子玉・棗玉・丸玉・白玉・ビーズ玉がある。整理作業が完了していないため正確な点数は確定していないが、総数は600点以上になると思われる。このうち整理作業が終了したものについて報告する。



第33図 主体部出土装身具実測図①(1:1)



第34図 主体部出土装身具実測図②(1:1)

第4表 出土装身具類表(1)

A. 純
純は次述所によるとあるのであり、命のいき物により變り生じる可能がせらる。

純のうちには、金の純、金の金純等がある。純の上に「純」の字を記す。

純の上に「純」の字を記す。

純の上に「純」の字を記す。

純の上に「純」の字を記す。

純の上に「純」の字を記す。

純の上に「純」の字を記す。

真

種別番号	種類	材質・形状	重さ (g)	a (mm)	b (mm)	c (mm)	d (mm)	e (mm)	f (mm)	外寸幅 (mm)	内寸幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)
33	金環	金・丸環	296	1630	1930	1230	330	270	330	365	410	4.1	665
34	金環	金・小金	315	1830	1925	1225	335	220	315	350	410	4.1	702
35	金環	金・中金	242	1630	1680	1760	325	250	275	320	380	4.1	520
36	金環	金・小金	131	1625	1625	1625	255	255	220	230	240	3.8	565
37	金環	金・中金	625	1915	2120	1550	265	290	235	300	325	2.5	215
38	金環	金・中金	652	1920	2180	1670	285	285	285	295	325	2.4	212
39	金環	金・中金	237	2235	2240	1655	295	275	280	270	295	2.4	212
40	金環	金・中金	238	2320	2320	1655	255	255	210	240	240	2.4	205

種別番号	種類	材質	重さ (g)	a (mm)	b (mm)	c (mm)	d (mm)	e (mm)	f (mm)	外寸幅 (mm)	内寸幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)
41	純	純 (Dark Green; Forest Green)	6765.96	0.36	1470	470	775	775	130	5.50	4.40	2.8	1464.75

空玉

種別番号	種類	材質	重さ (g)	a (mm)	b (mm)	c (mm)	d (mm)	e (mm)	f (mm)	外寸幅 (mm)	内寸幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)
42	真	凹面 (Faceted Blue)	994.26	132	1165	1435	160	120	2.0	2.5	2.0	2.5	2669
43	真	水滴形 (Teardrop)	NEUTRAL	1.71	1320	1320	13.0	15.5	15.0	13.0	2.5	2.5	702
44	真	灰丸 (Greyball)	NEUTRAL	1.96	1085	930	1.35	1.35	4.0	4.0	4.0	4.0	2659
45	真	W.G. & (Kerosene)	NEUTRAL	0.84	1144	1144	2.15	1.35	3.0	2.65	1.50	2.65	2633
46	真	白 (White)	DATA (Cessna Decodes) (Towson)	12.125 (R/22)	1.04	1144	11.75	2.35	2.15	3.0	3.0	3.0	3222

第5表 出土裝身具觀察表②